

宮尾Ⅲ遺跡

2022

島根県教育委員会

宮尾Ⅲ遺跡

2022

島根県教育委員会

序

本書は、島根県教育委員会が島根県土木部道路建設課から依頼を受けて、令和3（2021）年度に実施した国道432号菅原広瀬バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をとりまとめたものです。

遺跡が位置する安来市広瀬町は、戦国時代、中国地方に霸を唱えた尼子氏の本拠地であり、近世初頭まで出雲地方の中心地でした。

本書で報告する宮尾Ⅲ遺跡では、竪穴建物など弥生時代の生活の跡が見つかったほか、縄文時代の落し穴や古墳時代の土器も確認されました。広瀬町において、弥生時代の遺跡が発掘調査されたのは初めてで、広瀬町の歴史を考える上で貴重な資料を得ることができました。

本報告書がふるさと島根の歴史を伝える基礎資料として、学術並びに歴史教育のために広く活用されることを期待します。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の作成にあたり御協力いただきました島根県土木部をはじめ、安来市、地元並びに関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

令和4年3月

島根県教育委員会

教育長 野津建二

例 言

- 1 本書は、島根県土木部道路建設課から依頼を受けて、島根県教育委員会が令和3年度に実施した国道432号菅原広瀬バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をとりまとめたものである。
- 2 本報告書の発掘調査対象遺跡は下記のとおりである。
宮尾Ⅲ遺跡（島根県安来市広瀬町広瀬330外）
- 3 発掘調査は島根県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、宮本正保が担当した。
- 4 発掘調査作業（安全管理、発掘作業員の雇用、機械による掘削、測量等）については、次の機関に委託した。
祥好建設株式会社（松江市下東川津町）
- 5 発掘調査及び報告書作成にあたっては、次の方々から御指導をいただいた。（五十音順、肩書は当時）
足立克己（安来市文化財保護委員）、会下和宏（島根大学総合博物館教授）、大塚 充（安来市教育委員会文化財課文化財係長）
- 6 発掘調査に際しては、次の機関から御協力・御助言をいただいた。
広瀬交流センター、安来市建設部土木建設課、安来市教育委員会
- 7 本調査に伴う自然科学分析は、次の機関に委託し、その成果は第4章に掲載した。
文化財調査コンサルタント株式会社
- 8 本書に掲載した遺構・遺物の写真は宮本が撮影した。また、掲載した遺構図・遺物実測図の作成・浄書は、調査員等が行ったほか、遺物の分類・鑑定等は埋蔵文化財調査センター職員の協力を得た。
- 9 本書の執筆は宮本が行い、第4章は執筆者を明記した。編集は宮本が担当した。
- 10 本書に掲載した遺物及び実測図・写真等の資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（島根県松江市打出町33番地）にて保管している。
- 11 本書の編集にあたっては、DTP方式を採用した。

凡 例

- 1 遺構図中の方位北は、測量法にもとづく平面直角第III座標系X軸方向を指し、座標系XY座標は世界測地系による。
- 2 遺構図中のレベルは海拔高を示す。
- 3 本書で使用した第5図は国土地理院発行の1/25,000地図（揖屋・広瀬・出雲布部）を使用して作成したものである。
- 4 本書に掲載する土層等は、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色標監修）にしたがって記載した。
- 5 本書で使用した遺構略記号は以下のとおりである。

S I : 穴穴建物 S D : 溝状遺構 S K : 土坑 S X : 性格不明遺構 P : ピット
- 6 本書で使用した挿図の縮尺は以下のとおりである
遺構：1/60 土器：1/3 金属器：1/2 石製品：1/2・1/8
- 7 本書で使用した遺構・遺物の表現は以下による

 被熱（燒土）  石製品の明瞭な使用痕
- 8 本書で用いた土器の分類及び編年は以下の論文・報告書に依拠している。
 - (1) 弥生土器
鹿島町教育委員会『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡』1992
 - (2) 須恵器
大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 1994
- 9 註は各章ごとに連番を振り、章末に配置した。

本文目次

第1章 調査の経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘作業と整理作業の経過	2
第3節 調査体制	3
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査方法と成果	
第1節 調査の方法	11
第2節 基本順序	13
第3節 A区の検出遺構とその遺物	15
第4節 B区の検出遺構とその遺物	35
第4章 自然科学分析	
宮尾Ⅲ遺跡発掘調査に伴う樹種同定及びAMS年代測定	41
渡辺正巳：文化財調査コンサルタント株式会社	
第5章 総括	
第1節 遺跡の立地と遺構	46
第2節 遺跡の評価	47

挿図目次

第1図 宮尾Ⅲ遺跡の位置	1
第2図 菅原広瀬バイパス予定地内の試掘確認調査箇所	3
第3図 祖父谷水田地区・(仮称)広瀬トンネル地区試掘確認トレンチ位置図	3
第4図 祖父谷水田地区・(仮称)広瀬トンネル地区試掘確認トレンチ実測図	4
第5図 遺跡の位置と周辺の遺跡	6
第6図 試掘トレンチ位置図・本発掘調査範囲図	12
第7図 試掘トレンチ実測図	13
第8図 調査区配置図・調査前地形測量図	14
第9図 調査終了後地形測量図・遺構位置図	15
第10図 土層実測図	16
第11図 A区遺構位置図	17
第12図 S101実測図	18
第13図 S101炉実測図	19
第14図 S102実測図(1)	20
第15図 S102実測図(2)	21
第16図 S102土器出土状況実測図	21
第17図 A区遺構出土遺物実測図	22
第18図 加工段1実測図	23
第19図 加工段2～6実測図	24
第20図 加工段2～6土層図・断面図	25
第21図 加工段7実測図	26
第22図 柱穴列実測図	27
第23図 柱穴列土層図	27
第24図 柱穴列断面図	27
第25図 SDO1実測図	28
第26図 SDO2実測図	28
第27図 SKO1・04～07・A区東部ピット位置図	29
第28図 SKO1・04～07実測図	30
第29図 A区東部ピット実測図	30
第30図 A区南西部ピット位置図	31
第31図 A区南西部ピット実測図	32
第32図 SXO1実測図	33
第33図 A区遺構外出土遺物実測図(1)	34
第34図 A区遺構外出土遺物実測図(2)	35
第35図 B区遺構位置図	36
第36図 S103実測図(1)	37

第37図 S1O3実測図(2)	38
第38図 B区出土遺物実測図	39
第39図 B区ピット実測図	40

表目次

第1表 文化財保護法に基づく提出書類	2
第2表 周辺の遺跡一覧表	7
第3表 宮尾Ⅲ遺跡出土土器観察表	49
第4表 宮尾Ⅲ遺跡出土石製品観察表	50
第5表 宮尾Ⅲ遺跡出土金属製品観察表	50

写真図版目次

図版1	図版9
遺跡遠景(東から)	加工段1ピット完掘
遺跡から広瀬市街を望む	加工段1床面落ち込み
図版2	図版10
調査前近景(東から)	北斜面加工段群(加工段2～6)検出
A区西壁土層	加工段・P63・SK02土層
図版3	加工段2～4土層
A区南壁土層	加工段3土層
A区－B区間土層	加工段6土層
図版4	図版11
S1O1土層	加工段2～6完掘
S1O1床面検出	図版12
図版5	加工段7
S1O1完掘	SD01土層
S1O1炉検出	SD02土層
S1O1炉土層	SD01遺物出土状況
S1O1炉完掘	図版13
S1O1炉完掘(東から)	SD02完掘
図版6	SK01完掘
S1O2土層	SK03完掘
S1O2床面検出	SK02完掘
図版7	図版14
S1O2床面遺物出土状況1	SK04完掘
S1O2床面遺物出土状況2	SK05土層
S1O2壁際溝土層	図版15
P18土層(遺物出土状況)	SK05完掘
S1O2完掘	SK06土層
図版8	
加工段1検出	
加工段1土層	

図版16

SX01完掘

P16土層

P25土層

P26土層

P47土層

図版17

P16・26完掘

P63完掘

図版18

A区南部遺構完掘(加工段1・SD02ほか)

SD02周辺ピット完掘

図版19

A区北部遺構完掘

図版20

B区遺構検出(南東から)

SI03検出(南東から)

図版21

壁際溝1・2土層

壁際溝2・3土層

P86土層

P86内土器

SI03床面土器

図版22

SI03掘削状況

SI03完掘

図版23

P68-69土層

P81-80・78-79完掘

P68-69・95-94完掘

P67完掘

B区全景(南東から)

図版24

A区遺構・遺構外出土遺物

A区遺構出土遺物

図版25

A区遺構出土遺物

A区遺構外出土遺物

図版26

A区遺構外出土遺物

B区遺構出土遺物

図版27

B区遺構外出土遺物

B区遺構出土遺物

遺跡出土石製品

A区出土金属製品

第1章 調査の経過

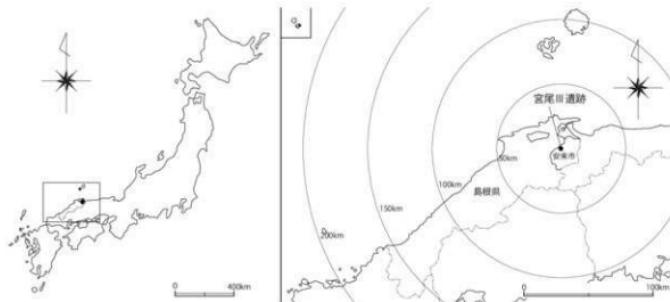
第1節 調査に至る経緯

1. 事業計画の概要

一般国道432号は、広島県竹原市を起点に島根県松江市に至る全長約210kmの路線である。平成15年に島根県が策定した「しまねの新たな道づくりビジョン」においては、県内外の都市間を連結し、県内の道路網の骨格となる一般道路である広域幹線道路に位置づけられている。一方で、安来市広瀬町内の現道は急カーブが多く、また道路幅が狭いため車両の離合が困難な箇所があり、また歩道も整備されていないため、運転者・歩行者にとって不便な状況となっている。こうした問題を解決するため、安来市広瀬町祖父谷から同町菅原に至る延長3.8kmのバイパスが計画され、平成15年度に「菅原広瀬バイパス」として事業着手された。このうち南側の1工区2.7kmは平成24年に開通しており、飯梨川以北の2工区の事業が進められている。

2. 調査に至る経緯と法的手続き

菅原広瀬バイパス事業に先立ち、平成24年11月に島根県土木部松江県土整備事務所から島根県教育委員会に対して、事業地内の埋蔵文化財の有無について照会があった。これを受け島根県教育委員会は遺跡分布調査を実施し、平成25年3月4日付け島教文財第1105号で祖父谷水田地区など3カ所の要注意箇所が存在する旨を回答している。これに対し、松江県土整備事務所から祖父谷水田地区と運動公園地区について試掘確認調査の依頼があり、島根県教育委員会は平成25年11月にこれを実施した。調査の結果、祖父谷水田地区では遺構・遺物の検出はなかったが、運動公園地区では焼土面や土坑、古墳時代初頭と見られる土器が確認され、当該期の集落の存在が想定されたことから、この地区的520m²について本発掘調査が必要である旨を報告した。これを受け、島根県土木部と島根県教育委員会の間で事業地内の埋蔵文化財の取り扱い協議が行われ、宮尾III遺跡として遺跡の発見通知が島根県教育委員会あてに提出された。これに対し、島根県教育委員会教育長は記録保存のための発掘調査の実施を勧告した。残る（仮称）広瀬トンネル地区については、平成26年11月に試掘調査を実施して、溝や土坑などを確認し、縄文土器や弥生土器も出土した。しかし、



第1図 宮尾III遺跡の位置

第1章 調査の経過

第1表 文化財保護法に基づく提出書類

遺跡発見の通知（法第97条第1項）

文書番号	種類及び 名称	所在地	土地所有者	面積(m ²)	原因	提出者	期間	主な 指示事項
松尾Ⅲ第3666号 HQ51214	集落跡	島根県安来市 広瀬町305-6, 330	国土交通省	520	道路建設	松江国土整備事務所長	H26.10.1～	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第99条）

文書番号	種類及び 名称	所在地	面積(m ²)	原因	報告者	担当者	期間
島教文財第51号 R3.4.28	集落跡	島根県安来市 宮尾川通路 広瀬町330外	300	道路建設	島根県教育厅埋蔵文化財 調査センター長	宮本正保	R3.5.10～R3.6.25

埋蔵文化財發見通知（法第100条第2項）

文書番号	物件名	出土地	発見者	土地所有者	現保管場所
島教文財 第374号の8 R3.8.5	縄文土器 ピニール袋1 弥生土器・土師器 コンテナ6 須恵器 ピニール袋1 石材・骨器 ピニール袋1 金銀器 ピニール袋2	島根県安来市広瀬町330 宮尾川通路	島根県教育委員会教育長 野津津二	国土交通省	島根県教育厅埋蔵文化財 調査センター

終了報告

文書番号	遺跡名	調査期間	面積(m ²)	提出者	提出先
島教文財第469号の2 R3.8.2	宮尾川通路	R3.5.10～R3.7.2	450	島根県教育委員会教育長	島根県土木部道路建設課長

満などの時期は近世以降と見られ、出土した土器も後世の流入によると考えられたため、本発掘調査は不要と判断した。

宮尾Ⅲ遺跡の発掘調査は、島根県土木部道路建設課から島根県教育庁文化財課が依頼を受け、島根県教育厅埋蔵文化財調査センターが実施した。

第2節 発掘作業と整理作業の経過

1. 発掘作業

発掘作業は令和3（2021）年5月10日～7月2日に実施した。試掘調査後に行われた事業範囲の設計変更に伴い、本発掘調査対象面積は300m²に減少した。重機による表土掘削を5月10・11日に行い、5月12日から包含層掘削を開始した。併せて土層確認のため調査区に南北トレンチ、東西トレンチを設定して掘削を行った。5月24日には調査区南部で加工段1、北部で加工段2～6を検出した。5月28日にはS1O1、6月1日にはS1O2をそれぞれ確認した。

6月8日には足立克己氏、会下和宏氏、大塚 充氏に調査指導を受けたが、遺構の範囲が調査区外へ広がる可能性が高いとして、調査範囲を拡張するよう指導があった。これを受けて当初の調査区をA区とし、この調査区の東部を100m²拡張した。ここでは落し穴1、袋状土坑2、加工段7などを新たに確認した。また、北斜面に新たに50m²の調査区を設定し、B区とした。B区では重機による表土掘削を6月17・18日に実施し、その後6月21日まで包含層掘削、22日には遺構検出を実施した。引き続き遺構掘削を行い、土層を確認・記録したのち完掘した。ここではS1O3、ピット多数を確認した。

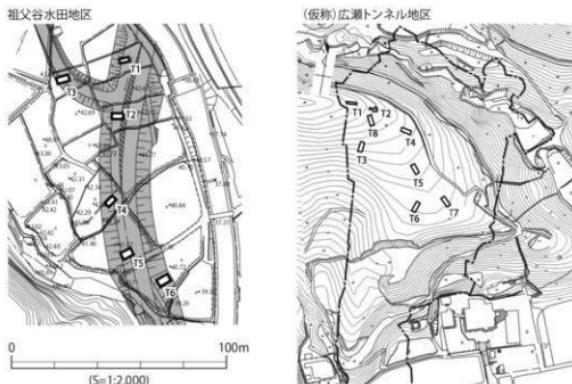
発掘調査の完了協議は令和2年6月24日に実施した。6月25日には掘削作業を終了し、6月29日に完了検査、その後写真撮影・実測・地形測量を行い7月2日に現地調査を終了した。なお、6月27日には遺跡周辺の住民を対象に遺跡の現地公開を行い、約30名の参加を得た。

2. 整理作業

遺物の水洗・注記・接合作業は、発掘作業と並行して現地の事務所で実施した。現地調査終了後



第2図 普原広瀬バイパス予定地内の試掘確認調査箇所



第3図 祖父谷水田地区・(仮称)広瀬トンネル地区試掘確認トレンチ位置図

の令和3年7月5日からは島根県埋蔵文化財調査センターにおいて作業を継続し、遺物の接合・復元・実測等の作業及び図面・写真類の整理作業を行った。現地調査終了後に整理した図面・写真等の記録類については、出土品と併せて総合的な整理検討を行い、遺構・遺物のトレース、写真撮影、割付、原稿執筆を行った。画像処理・図版作成・編集等にはAdobe社のソフトを使用した。

第3節 調査体制

発掘調査・報告書作成は次の体制で行った。

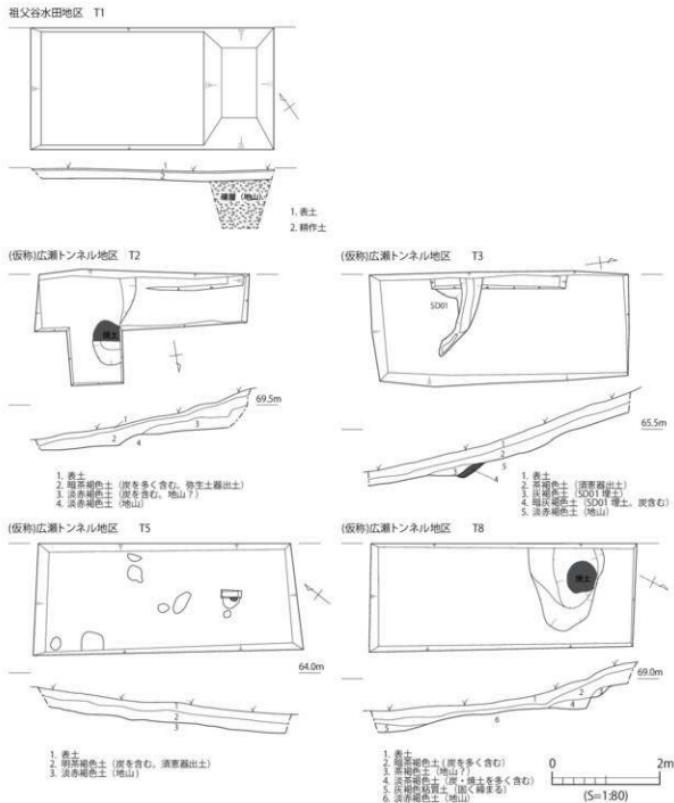
調査主体 島根県教育委員会

教育庁文化財課

課長 中島正顕、文化財グループ GL 田中明子、管理指導スタッフ調整監 池淵俊一
埋蔵文化財調査センター

第1章 調査の経過

所長 植 真治、総務課長 坂根祐二、高速道路調査推進スタッフ調整監 热田貴保
 管理課長 深田 浩
 高速道路調査推進スタッフ企画幹 宮本正保
 会計年度任用職員調査補助員 大田晴美、原 英裕



第4図 祖父谷水田地区・(仮称) 広瀬トンネル地区試掘確認トレンチ実測図

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

宮尾Ⅲ遺跡は、安来市広瀬町広瀬に所在する。安来市は鳥取県の東端、鳥取県との県境に位置し、北は中海に面している。南部は中国山地に連なる山地で、そこに源を発する飯梨川、伯太川が北流し、下流部においては県内有数の規模をもつ能義平野を形成する。飯梨川は、特に中世以降、上流域における製鉄のための砂鉄採取、いわゆる鉄穴流しにより発生した大量の土砂を下流に供給し、現在の地形をつくった。奈良時代、中海は飯梨川下流域に大きく入り込み、河口は現在約5km南にあったと考えられており、弥生時代には、中海はさらに南に広がっていた可能性がある。

広瀬町は安来市の南西部、飯梨川上流～中流域に位置する。平野が広がる下流域とは対照的に大部分が山地で、飯梨川とその支流である山佐川が流れる川沿いに小規模な平地が存在する。遺跡は標高約70mの尾根上および北側斜面に立地する。飯梨川の北岸に所在する標高218mの三笠山東麓に位置しており、遺跡からは広瀬町の中心部から飯梨川下流域への眺望が広がる。調査対象地は、針葉樹や竹がわずかに生える荒蕪地であった。尾根上はごく緩やかな斜面、北斜面は平坦面が階段状に連なっており、いずれも後世の地形改変が想定された。また、遺跡東側は広瀬中央公園となっており、この公園の造成時に旧地形は大きく改変されている。

第2節 歴史的環境

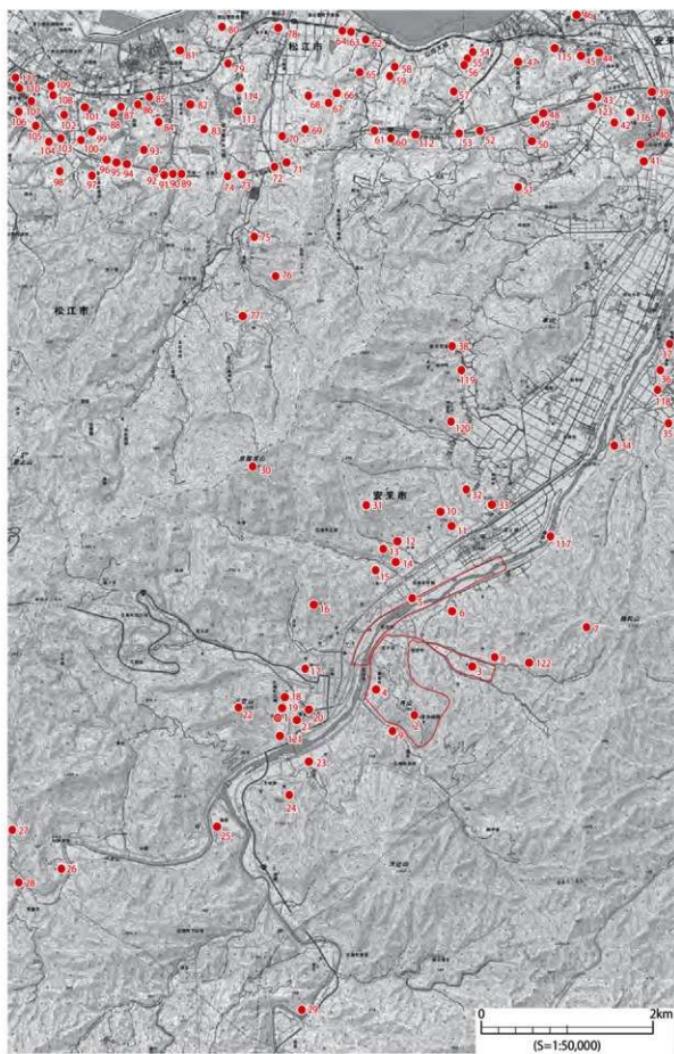
旧石器・縄文時代

旧石器時代の遺跡は、安来地域においては、中海沿岸部の小汐手遺跡（黒井田町）、カンボウ遺跡（吉佐町）などで旧石器時代の石器が出土しているが、宮尾Ⅲ遺跡のある広瀬地域では確認されていない。

縄文時代の遺跡は、能義平野周辺では伯太川流域の安田深田遺跡（伯太町）で落し穴と中期の土器を、経塚鼻遺跡（同）でも落し穴と見られる土坑と晩期の土器を確認した。中海沿岸部では島田黒谷I遺跡（島田町）で前期～後期の土器がまとまって出土したほか、高広遺跡（黒井田町）、石田遺跡（吉佐町）でも縄文土器の出土が見られる。広瀬地域では、本遺跡の南約2kmに位置する菅蒼遺跡（29）で押型文土器などが出土し、早期の遺跡であることが知られる。飯梨川対岸に位置する土居成遺跡（23）や経負坂古墳群（広瀬町東比田）では落し穴を複数確認し、後期の土器が出土した。このほか詳細は不明だが、広瀬町南部に所在する須釜遺跡（27）、常願寺遺跡（28）、殿ノ奥遺跡（広瀬町西比田）など河川に近い平地で縄文土器が出土している。宮尾遺跡（19）、伽羅久利神社遺跡（18）、本郷上口遺跡（26）でも縄文土器が出土したとされている。

弥生時代

前期の遺跡は少ないが、経塚鼻遺跡で環濠が、柳II遺跡（荒島町・久白町）で壇枡が確認されている。中期以降は礎近遺跡（松江市東出雲町）で完形の土器が出土したほか能義平野周辺の丘陵部で遺跡が確認される。能義平野東部の丘陵では山の神遺跡（吉佐町）、高広遺跡、宮内遺跡（宮内町）、南部の丘陵では八幡谷遺跡（大塚町）、笠松遺跡（清井町）、永昌寺の谷遺跡（伯太町）で竪穴建物などが検出された。後期には遺跡数が増加し、飯梨川下流の荒島地域に柳遺跡（43）、竹ヶ崎遺跡（同）



第5図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第2表 周辺の遺跡一覧表

1 宮尾Ⅲ遺跡	43	塩津丘陵遺跡群 塩津山古墳群 塩津山遺跡 竹ヶ崎遺跡 柳遺跡・柳II遺跡	83 五反田1号墳
2 史跡富田城跡			84 五反田遺跡
3 新宮谷遺跡			85 東出雲中学校東側遺跡
4 台頭成横穴群			86 東出雲中学校校庭遺跡
5 富田川河床遺跡	44	仙山古墳	87 屋台垣横穴墓群
6 才の峠古墳群	45	大成古墳	88 四ツ辶横穴墓群
7 独松山城砦跡群	46	高塚山古墳	89 堂床遺跡
8 新宮党館跡	47	造山古墳群	90 堂床古墳
9 日向丸城跡	48	小久白墳墓群	91 勝負遺跡
10 石原遺跡	49	神庭谷遺跡	92 林廻り古墳
11 佐々彦神社裏古墳群	50	若塚古墳	93 大鳥才の神遺跡
12 石原古墳	51	山の神古墳群	94 四ツ辶I遺跡
13 石原城跡	52	中山遺跡	95 四ツ辶II遺跡
14 石原公会堂横遺跡	53	亀の尾古墳	96 原ノ前遺跡
15 亀井ヶ成城・誓願寺裏城砦跡群	54	清水山1号墳	97 洹山池遺跡
16 大成山城砦跡群	55	坪内横穴群	98 安垣古墳群
17 広瀬藩邸跡	56	塙田古墳群	99 赤坂池横穴墓群
18 伽羅久利神社遺跡	57	客山古墳群	100 洹山池古墳群
19 宮尾遺跡	58	偏前山古墳群	101 塙谷古墳群
20 八幡燒窯跡	59	中尾崎古墳	102 床寺遺跡
21 上広瀬遺跡	60	巻林横穴墓	103 長廻古墳
22 三笠山城跡	61	巻林遺跡	104 長廻横穴墓群
23 土居成遺跡	62	岩屋古墳群	105 後谷池東横穴墓群
24 寺山城跡	63	金成山古墳	106 後谷横穴群
25 福賴古墳群	64	金成山窓跡	107 岸尾遺跡
26 本郷上口遺跡（横穴群含む）	65	櫻廻古墳群	108 烏島古墳
27 須釜遺跡	66	焼田遺跡	109 大木権現山古墳群
28 常願寺遺跡	67	焼田古墳群	110 鶴賀遺跡
29 菅沢遺跡	68	油免古墳群	111 恵比須遺跡
30 京羅木山城砦跡群	69	雉子谷古墳群	112 京羅木山城砦跡群
31 膽山城跡	70	流田遺跡	113 附谷遺跡
32 かわらけ谷横穴墓群	71	御崎谷遺跡	114 黄泉谷古墳
33 鶯ノ湯病院跡横穴墓群	72	土元遺跡	115 白岩古墳群
34 矢田古墳群・横穴墓群	73	毛無横穴墓	116 山根古墳群
35 祝谷横穴群	74	毛無遺跡	117 檜谷古墳群
36 能義神社奥院古墳群	75	古屋窓跡	118 上の谷古墳群
37 能義神社遺跡	76	福良城跡	119 岩船遺跡
38 飯梨岩舟古墳	77	野呂城跡	120 木野山社古墳群
39 安養寺墳墓群	78	中意東遺跡	121 八幡山横穴群
40-1 仲仙寺墳墓群仲仙寺支群	79	平賀遺跡	122 今田たたら跡
40-2 仲仙寺墳墓群宮山支群・宮山古墳群	80	崎田遺跡	123 塩津神社古墳
41 下山墳丘墓	81	揖屋神社古墳	
42 橋松古墳群	82	高井横穴墓群	

などからなる大規模な集落遺跡が形成される。能義平野東部～南部の丘陵では、中期に引き続き永昌寺の谷遺跡、笠松遺跡で集落が営まれるほか、才ノ神遺跡（黒井田町）、越峰遺跡（同）、岩屋口北遺跡（佐久保町）、白コクリ遺跡（同）、潜戸谷遺跡（沢町）などで竪穴建物などを確認した。陽徳遺跡（門生町）では、中海を見下ろす標高80mの山頂で確認された竪穴建物5棟が高地性集落と考えられ、注目される。

墳墓では、荒島地区で仲仙寺墳墓群（40）、安養寺墳墓群（39）といった大型の四隅突出型埴丘墓が多数築造されるほか、能義平野南東部のカウカツ遺跡（伯太町）でも四隅突出型埴丘墓が確認され、吉備地方の特殊土器が出土している。大木権現山1号墳（109）も四隅突出型埴丘墓の可能性を持つ。能義平野の東～南側丘陵では、四隅突出型埴丘墓以外にも、土壇墓と吉備の特殊土器を確認した白コクリ遺跡のほか、九重土壇墓（九重町）、鍵尾土壇墓（沢町）、長曾土壇墓群（黒井田町）、鳥田黒谷Ⅲ遺跡（鳥田町）、永昌寺の谷遺跡が知られる。

広瀬地域では、殿ノ奥遺跡や富田川河床遺跡（5）の包含層から弥生土器が出土している。本郷上口遺跡でも中期～後期の土器が出土したとされ、詳細は不明ながら弥生時代の遺跡が存在したことは確実である。

古墳時代

集落では、意宇川流域の渋山池遺跡（97）、四ツ廻I遺跡（94）も前期の集落で、中期以降は岩屋口南遺跡（佐久保町）、越峰遺跡、高広遺跡（黒井田町）、門生黒谷Ⅲ遺跡（門生町）がある。浜小崎遺跡（黒井田町）も特殊ピットを備えた前期の竪穴建物2棟がある。生産遺跡では、勝負遺跡（91）、四ツ廻II遺跡（95）、大原遺跡（佐久保町）で中期に玉作が行われる。後期には高烟窯跡（門生町）などからなる門生古窯跡群で須恵器生産が行われる。また岩屋口南遺跡、徳見津遺跡（吉佐町）などで古墳時代終末期の鍛冶遺構のほか鍛冶淬・製鍊滓が確認されており、製鉄が行われた可能性が指摘されている。

飯梨川下流域の西岸にある荒島地区では、前期に塩津山墳墓群（43）、造山古墳群（47）、大成古墳（45）など出雲地方を代表する大型方墳が築造される。能義平野東側の丘陵では新林古墳群（宮内町）、陽徳II区1号墳（門生町）、吉佐山根1号墳（吉佐町）などが知られるほか、直径25mと大型の円墳で竪穴式石槨を持つ五反田1号墳（門生町）がある。中期には、荒島地区で全長52mの前方後方墳である宮山1号墳（40-2）、42m×30m以上の方墳である清水山1号墳（54）などがあり、東側では全長42mの毘売塚古墳（黒井田町）、直径36mのあんもち山古墳（宮内町）などの前方後円墳・円墳が築かれ、小馬木2号墳（黒井田町）では家形埴輪、珠文鏡が出土している。後期後半には飯梨川西岸で塩津神社古墳（123）、飯梨岩舟古墳（38）など石棺式石室と呼ばれる精美的主体部をもつ古墳がつくられる一方、東岸では石室を持つ古墳は鳥取県境に近い神代塚古墳（吉佐町）、神宝古墳群（同）が知られる程度で、もっぱら横穴墓が造営される。横穴墓は平野周辺のほぼ全域で認められ、石棺をもつものや金銅装大刀・馬具など優秀な副葬品をもつものも少なくない。飯梨川流域の鷲ノ湯病院跡横穴墓群（33）、かわらけ谷横穴墓群（32）、平野東側の白コクリ横穴墓群（佐久保町）、高広横穴墓群（黒井田町）などをあげることができる。宮尾Ⅲ遺跡周辺では集落と考えられる上広瀬遺跡（21）、前方後円墳・方墳や横穴墓が確認されている佐々彦神社裏古墳群（11）、方墳2基からなる福頼古墳群（25）、八幡山横穴群（121）、台頭成横穴群（4）などがある。

古代

宮尾Ⅲ遺跡周辺は、天平5（733）編纂の『出雲国風土記』では意宇郡飯梨郷に含まれる。古代の遺跡では、能義平野南部に教吳寺（野方町）が造営され、舍人郷正倉跡推定地（沢町）では大型の掘立柱建物や炭化米が確認されている。また、車山（飯梨町）は『出雲国風土記』に記載のある「暑垣烽」に比定される。中山火葬墓（52）では石製骸骨器が出土し、形態から8～9世紀前半の可能性が報告されている。宮内遺跡・島田南遺跡（島田町）では墨書き土器やヘラ描き土器も出土し、周辺に官衙が存在した可能性も考えられる。広瀬地区では、飯梨川対岸の新宮谷遺跡（3）でこの時期の土師器・須恵器が出土している。石原遺跡（10）では鬼瓦が採集されている。

中世・近世

12世紀後半、広瀬地区とその周辺に能義郡富田莊が成立する。14世紀末には出雲国の守護所が置かれたことから広瀬地区は近世初頭まで出雲国支配の拠点となる。宮尾Ⅲ遺跡の北東1.5kmに位置する史跡富田城跡（2）はその中心であり、16世紀前半の一時期、中国地方に勢力を広げた尼子氏の本城である。1566年、毛利氏との戦いに敗れ開城した後は毛利氏やその家臣が城主となり、関ヶ原の戦いの戦功により入城した堀尾氏が松江に本拠を移したのち、廃城となる。周辺には、尼子氏一族で軍の中核を担っていた新宮党の居館跡と伝わる新宮谷遺跡や、空堀を作った城館が確認された土居成遺跡のほか富田城の攻防に関わる城館・城砦が多く認められ、当遺跡の西側に位置する三笠山城跡（22）もその一つである。

江戸時代には、広瀬藩が置かれ広瀬藩邸（17）が設けられる。飯梨川中流域では家島家による樋の追鉤（広瀬町布部）など高殿たらが操業される。宮尾Ⅲ遺跡周辺でも今田たら（122）があり、飯梨川流域の山間部ではたら製鉄が盛んに行われていたことがわかっている。また、1666年の洪水で壊滅した富田城の城下町である富田川河床遺跡（5）は、当時の広瀬の町を知るうえで貴重な資料を提供している。

参考文献

- 角川書店『角川日本地名大辞典32 烏根県』1991
- 平凡社『日本歴史地名体系第33巻 烏根県の地名』1995
- 加藤義成・校注『出雲国風土記』1965
- 広瀬町役場『広瀬町史』1969
- 広瀬町教育委員会『管辯遺跡発掘調査報告書』1981
- 広瀬町教育委員会『新宮谷遺跡発掘調査報告書』1982
- 広瀬町教育委員会『経負坂古墳群』2001
- 伯太町教育委員会『伯太町安田地内試掘調査報告書』1992
- 伯太町教育委員会『安田深田遺跡発掘調査報告書』2002
- 安来市『安来市誌』1970
- 安来市教育委員会『長曾土壤墓群』1981
- 安来市教育委員会『市道清水線試掘調査概要』1993
- 安来市教育委員会『浦ヶ部遺跡群発掘調査報告書』1994
- 安来市教育委員会『清水山古墳群発掘調査報告書』1994

第2章 遺跡の位置と環境

- 安来市教育委員会『小汐手遺跡 黒井田小林遺跡』1999
安来市教育委員会『清瀬地区発掘調査報告書』1999
安来市教育委員会『瀬戸谷遺跡』2000
安来市教育委員会『長曾土壤墓群・削畑1号墳』2000
安来市教育委員会『経塚鼻遺跡発掘調査報告書』2006
安来市教育委員会『土居成遺跡発掘調査報告書』2007
安来市教育委員会『永昌寺の谷遺跡・高倉遺跡』2008
安来市教育委員会『本郷上口遺跡発掘調査報告書』2011
島根県安来市『史跡富田城保存管理計画』2015
東出雲町教育委員会『大木椎丸山古墳群』1979
島根県教育委員会『広瀬町内遺跡群総合整備計画策定報告書』1983
島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』1984
島根県教育委員会『富田川』飯梨川河川改修に伴う富田川河床遺跡発掘調査報告書(4) 1984
島根県教育委員会『島根県埋蔵文化財調査報告書』第XⅠ集 1985
島根県教育委員会『一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ(島田南遺跡)』1992
島根県教育委員会『宮内道路・越峰遺跡』1993
島根県教育委員会『一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書 西地区Ⅰ』1993
島根県教育委員会『石田遺跡・カンボウ遺跡・国吉遺跡』1994
島根県教育委員会『白コクリ遺跡・大原遺跡』1994
島根県教育委員会『陽徳遺跡・平ラⅠ遺跡』1995
島根県教育委員会『才ノ神遺跡・普請場遺跡・島田黒谷Ⅰ遺跡』1995
島根県教育委員会『四ツ廻Ⅱ遺跡・林廻り遺跡・受馬遺跡』1996
島根県教育委員会『柳Ⅱ遺跡・小久白埴墓群・神庭谷遺跡』1996
島根県教育委員会『岩屋口遺跡・白コクリ遺跡(F区)』1997
島根県教育委員会『汎山池遺跡・原ノ前遺跡』1997
島根県教育委員会『島根県中近世館分布調査報告書〈第2集〉出雲・隠岐の城館跡』1998
島根県教育委員会『塙津丘陵遺跡群』1998
島根県教育委員会『かわらけ谷横穴墓群の研究』2001
島根県教育委員会『増補改訂島根県遺跡地図I(出雲・隠岐編)』2003
島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター『宮山古墳群の研究』2003
建設省中国地方建設局出雲工事事務所『斐伊川誌』1995

第3章 調査方法と成果

第1節 調査の方法

宮尾Ⅲ遺跡は安来市広瀬町広瀬に所在し、飯梨川中流域西岸の山地先端に近い尾根及び丘陵斜面に立地する。調査対象地は標高約70mで、広瀬町の市街地との比高差は約40mである。調査前の状況は、竹がまばらに生える竹林であったが、杉などの針葉樹もわずかに存在した。

菅原広瀬バイパス全体の試掘確認調査については第1章で述べたとおりであるが、宮尾Ⅲ遺跡については、平成25年11月に運動公園地区として祖父谷水田地区と併せて実施した。山地縁辺の尾根上にトレーンチ6カ所を設定して調査を行った結果、トレーンチ1でビットと溝状遺構を確認した。また、トレーンチ4では焼土と炭を含む層が存在し、これを切り込む土坑状の遺構も検出した。土坑状の遺構内からは石材や土器が出土し、土器の時期は古墳時代前期と報告された。

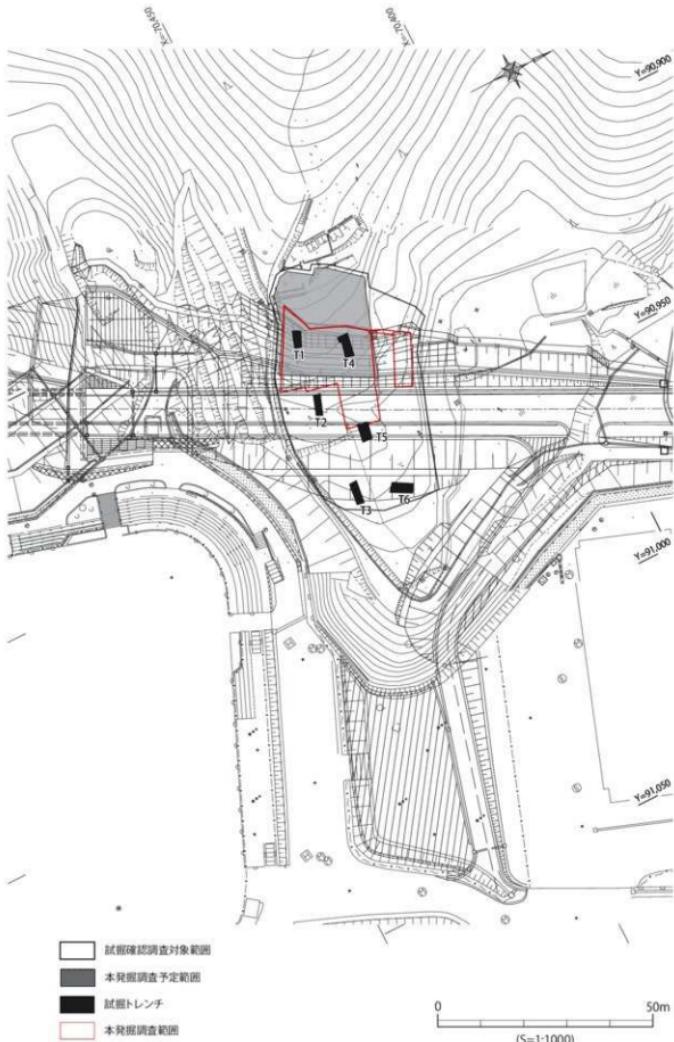
この結果、尾根上に古墳時代前期の遺構が存在すると想定されたため、トレーンチ1・4を含む範囲を調査対象として発掘調査を実施することとした。なお、試掘確認調査の結果を受けて設定した調査対象範囲は、西側約1/2が設計変更により工事対象範囲から外れたため、大きく減少した（第6図）。また、今回の調査開始後、遺構の範囲が広がる可能性が高いことから調査区を広げるよう指導を受け、当初の調査区を一部東側に拡張してA区とし、さらに北斜面にある平坦面にB区を設定して調査を継続した。B区については、階段状の平坦面が後世の削平を受けて形成されたと想定されたため、調査期間も考慮し、遺構が残存する可能性が高い平坦面先端側に設けた。

発掘調査では、国土座標を基準に10m四方のグリッドを設定し、北から南に算用数字、西から東にアルファベットを振りグリッド名とした（第8図）。

表土掘削はバケットに平爪を装着したバックホーを使用し、調査員の立会のもと少しづつ的に掘り下げた。その後、遺物包含層はスコップや鍬、ジョレンを用いて人力で掘削したが、出土遺物の粗密に合わせて適宜移植ゴテ等を併用した。掘削土の運搬には一輪車を用いた。包含層の遺物取り上げは基本的にグリッド名と層位の記録を行ったが、必要に応じて遺跡調査システムによる測量と35mm一眼レフデジタルカメラによる写真撮影を実施した。遺構掘削は、移植ゴテ、草刈りを使用して行った。基本的に土層観察用のベルトを設定するか、半裁して埋土を掘削し、土層観察を行いつづり下げた。土層は写真撮影後、必要に応じて断面図を作成した。

また、遺構内の出土遺物については、コンピュータ・システム株式会社の遺跡調査システム「SITE」による位置の実測または手測りによる実測図を作成し、出土位置を記録した後に取り上げた。遺構の平面図等も遺跡調査システム「SITE」を用いて測量し、出力後補正を行った。遺構等の写真は、基本的に35mm一眼レフのデジタルカメラによる撮影を行い、必要に応じて6×7版フィルムカメラ（モノクロネガ・カラーポジフィルム）による撮影を実施した。

整理作業は、現地調査と並行して出土遺物の水洗・注記を現地の事務所で実施し、現地調査終了後の7月上旬から埋蔵文化財調査センターにおいて本格的な報告書作成作業を開始した。遺物の接合・復元・実測図作成・写真撮影、遺構図の編集を行ったのち各図面のトレース、写真画質ほかの調整、原稿執筆・編集作業を実施した。図面トレース以降の作業は主にAdobe社製のCreative Cloudを用いてDTP方式で行った。



第6図 試掘トレンチ位置図・本発掘調査範囲図

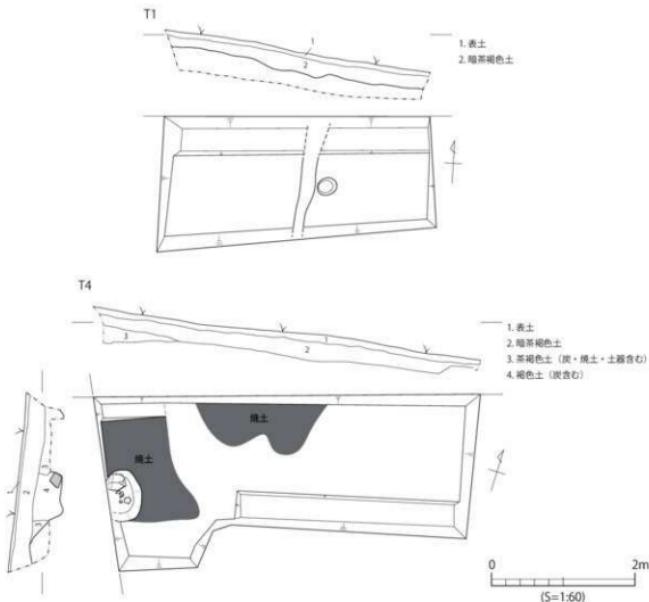
自然科学分析は、文化財調査コンサルタント株式会社に委託し、遺構出土の炭化材についてC14年代測定と樹種同定を行った。炭化材は、埋蔵文化財調査センターが採取したものを作成した。

第2節 基本層序

遺跡の基本層序は、A区の南壁とA・B区西壁で確認した（第10図）。

尾根上に位置するA区の土層は、上層から1層：表土—2層：灰黄褐色土でその下は地山となる。地表面から地山までの深さは50cm程度である。遺構は、加工段の一部を除き地山面に掘り込まれる。2層は自然堆積土と考えられる。一方、土層図には現れないが、北へ下る斜面にあるC1グリッド東部及びDグリッド一帯では、2層と地山との間に褐色土が存在する。この層は、遺構の上位に堆積する遺物包含層となっており、弥生土器が出土している。なお、調査区西壁の6層～11層は調査区の西端に位置するSiO₂の土層を示している。また、SiO₂を覆う3層からは、須恵器の蓋環が出土した。このほか、B2グリッドからC2グリッドにかけて、遺構検出面の土が地山ではなく遺物包含層である可能性が考えられたため、確認のため溝状に掘り下げを行った。結果、地山土と比較してしまってない土層であったが遺構・遺物は確認できず、風化を受けた地山と判断した。

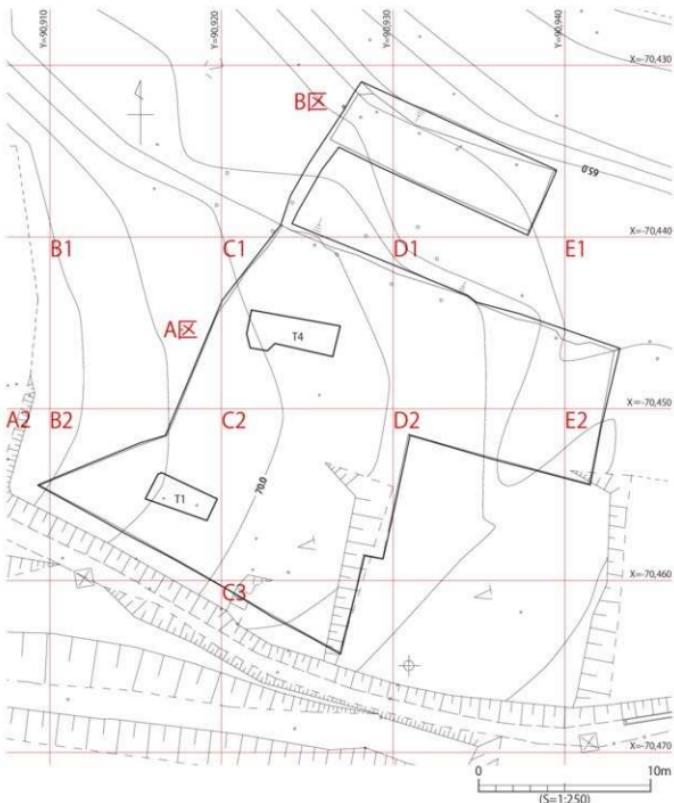
北側斜面中段の平坦面に位置するB区では、1層：表土—15層・16層：暗褐色土で、その下は



第7図 試掘トレンチ実測図

地山である。

B区でも、遺構は地山面に掘り込まれる。17層はB区北西端の一部に存在するのみである。15層は斜面上方からの流入による自然堆積と見られ、16層はその色調から旧表土の可能性がある。なお、北斜面に存在する階段状の平坦面は、後世の地形改変により形成されたものと考えていたが、堅穴建物やピットが比較的良好な状態で検出されたことから、もともと階段状の地形であったと見られる。

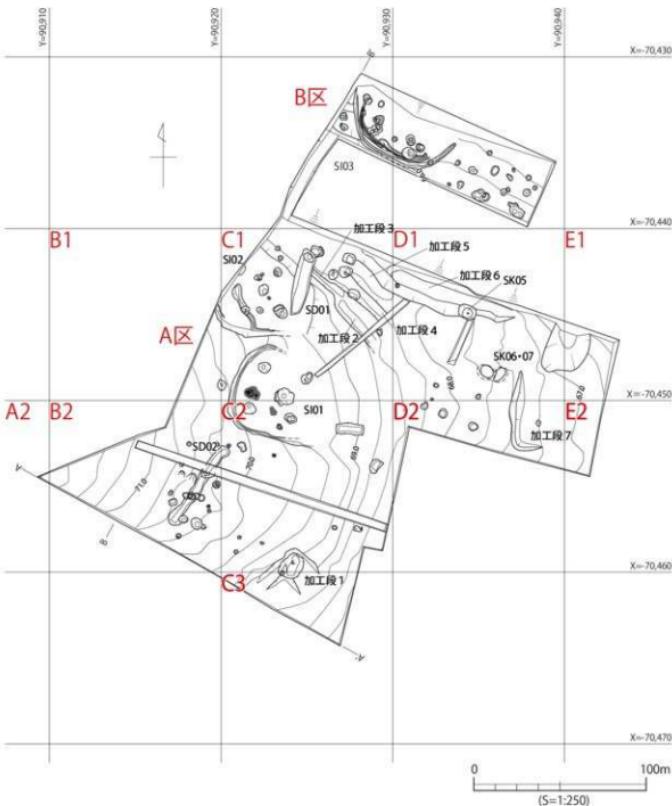


第8図 調査区配置図・調査前地形測量図

第3節 A区の検出遺構とその遺物

A区は、山地縁辺の尾根上に位置し、最高所の標高は71mである。検出した遺構は、竪穴建物2(SI01・02)、加工段7、土坑7(SK01～07)、溝状遺構2(SD01・02)ピット約40である(第9図)。土坑には縄文時代のものと見られる落し穴1、袋状土坑2を含む。

竪穴建物は、尾根筋付近から北側斜面に位置する。加工段は、尾根筋からやや下った斜面各所で確認したが、特に北側斜面に集中する。このほか、溝状遺構(SD02)周辺にはピットが集中している。

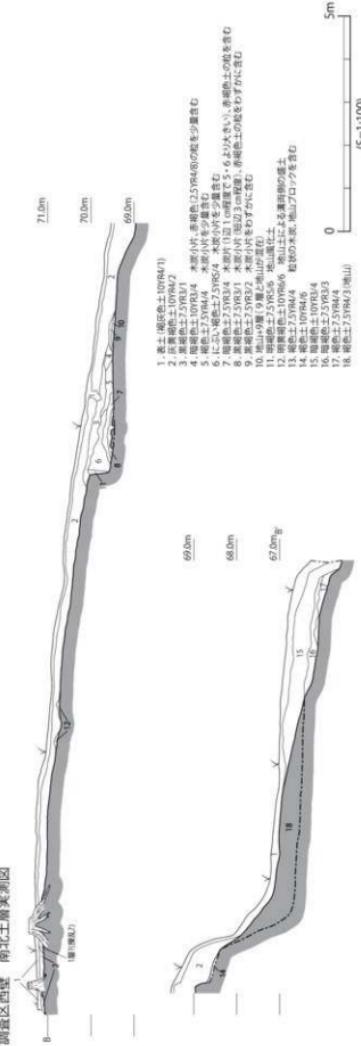


第9図 調査終了後地形測量図・遺構位置図

調査区南壁 東西土層実測図



調査区西壁 南北土層実測図



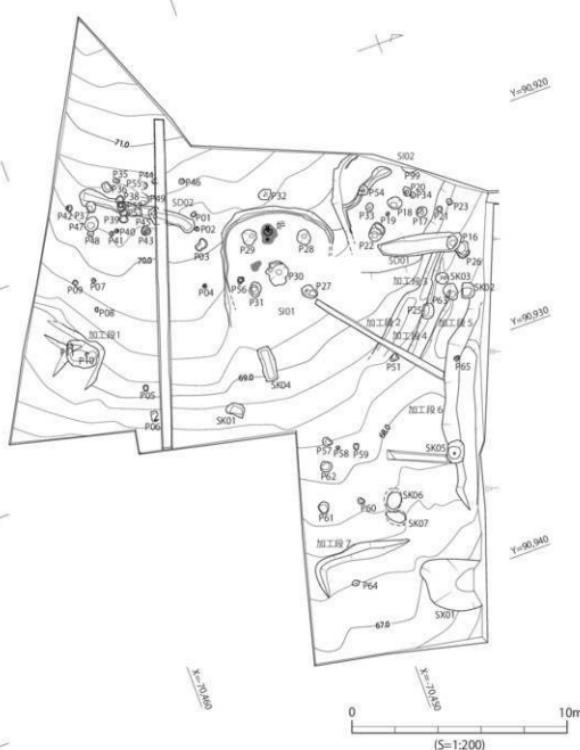
第10図 土層実測図

SI01（第12図）

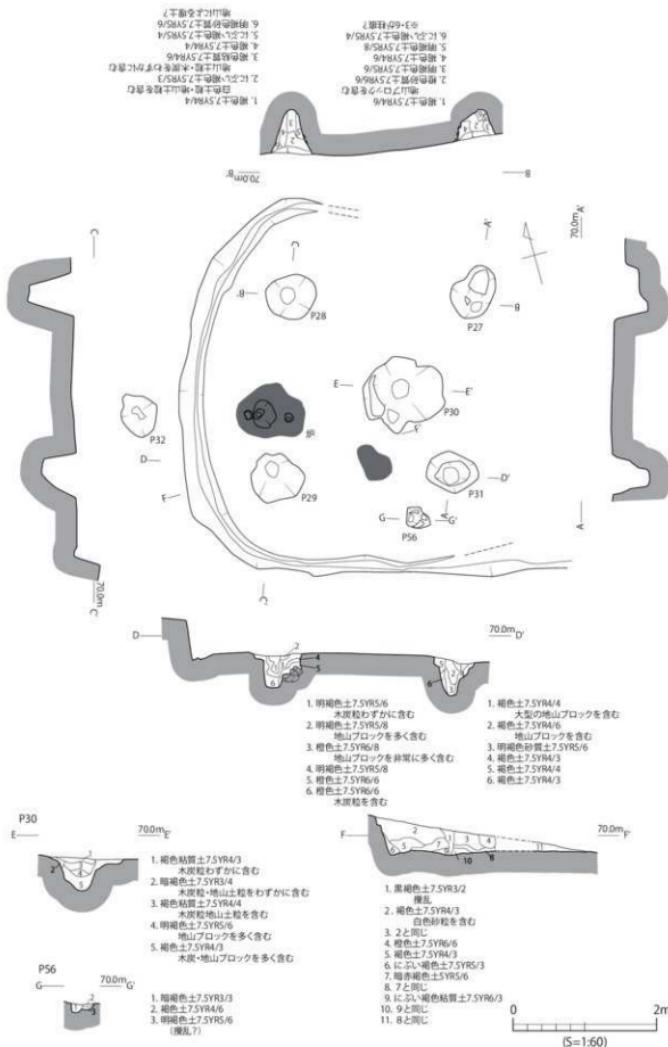
尾根筋からわずかに北に下った位置で検出された竪穴建物で、床面の標高は70mである。覆土の堆積が薄く、床面近くまで擾乱など後世の地形変容の影響を受けている。

平面形は扇円形で、斜面上方側となる床面の西側約1/2で壁と壁際溝を確認した。残存部分から、規模は一辺約5mと推定される。主柱穴はP27・P28・P29・P31で4本柱である。芯々距離は2.4～2.5m、主柱穴の規模は平面の長軸径が0.7m、下端のレベルも69.2m付近でほぼ等しい。なお、主柱穴の土層には柱痕が認められるものがある。また、床面南側の壁際溝に近い位置で、小規模なピット（P56）を検出している。

いわゆる中央ピットは不整な円形で径約1m、深さ0.4mで4本の主柱穴の中心からやや東にずれた位置に設けられる。埋土には粒状の木炭を含むが、被熱による変色は認められなかった。



第11図 A区造構位置図



第12図 S101実測図

このほか、床面では焼土面2カ所を確認した。このうち西側のものは焼土を除去すると、径40cm、深さ5cmの落ち込みを検出した(第13図)。埋土には焼土ブロックや粒状の木炭を含み、底面は赤く変色していたことから炉と考えられる。SI01床面で焼土を検出した時点での、鍛冶炉の可能性を想定し、床面付近の土を採取して精査を実施した。炉の調査でも改めて焼土や炉の埋土について採取し、同様に精査を行ったが、いずれも鍛冶関連遺物は検出できなかった。このほか、SI01の周辺では、ピット(P32)を検出した。

SI01出土遺物(第17図)

1はP31から出土した甕の肩部で、クシ描の波状文が施される。内面はヘラケズリと見られる。2は埋土から出土した甕の底部である。平底で、底部内面には指頭圧痕が認められる。時期は、文様や底部形態から草田4~5期か。

このほか、図示できなかったが、P28・P30からも弥生時代後期末と見られる土器片が出土している。

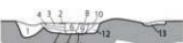
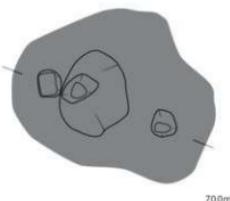
SI02(第14・15図)

SI01の北側で検出された竪穴建物で、床面の標高は69mである。SI01との距離は1m以下で、併存は考えられない。埋土のほとんどが木炭を含んでいるが、このうち床面に近い7層・8層に含まれる木炭は1~3cm大と比較的大型のもので、SI02に伴う可能性が高い。

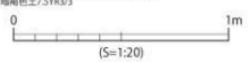
調査範囲の関係で全容は明らかにしえなかつたが、平面形は隅丸方形と見られ、北西側の一部で壁際溝を確認した。主柱穴はP17・P22・P54・P99と考えられ、4本柱であろう。主柱穴の規模は、平面の長軸径が50cm~80cmとばらつきがあるが、下端のレベルはほぼ同一である。建物の北東部から南東部は流出しているが、主柱穴の芯々距離は2.2~2.4mであることから、SI01に近い床面規模と考えられる。また、主柱穴の土層では一部に柱痕が認められ、粒状の木炭を含む層がある。いわゆる中央ピットは不整な円形で径約1m、深さ0.4mで4本の主柱穴のほぼ中心に設けられる。埋土には、木炭や焼土と見られる赤褐色土が粒状に含まれる。

床面では主柱穴以外に複数のピットと溝状遺構を確認した。溝状遺構に対応する柱穴配置は認められず、ピットも含めて、北側斜面で多数確認した加工段に連するものであろうか。

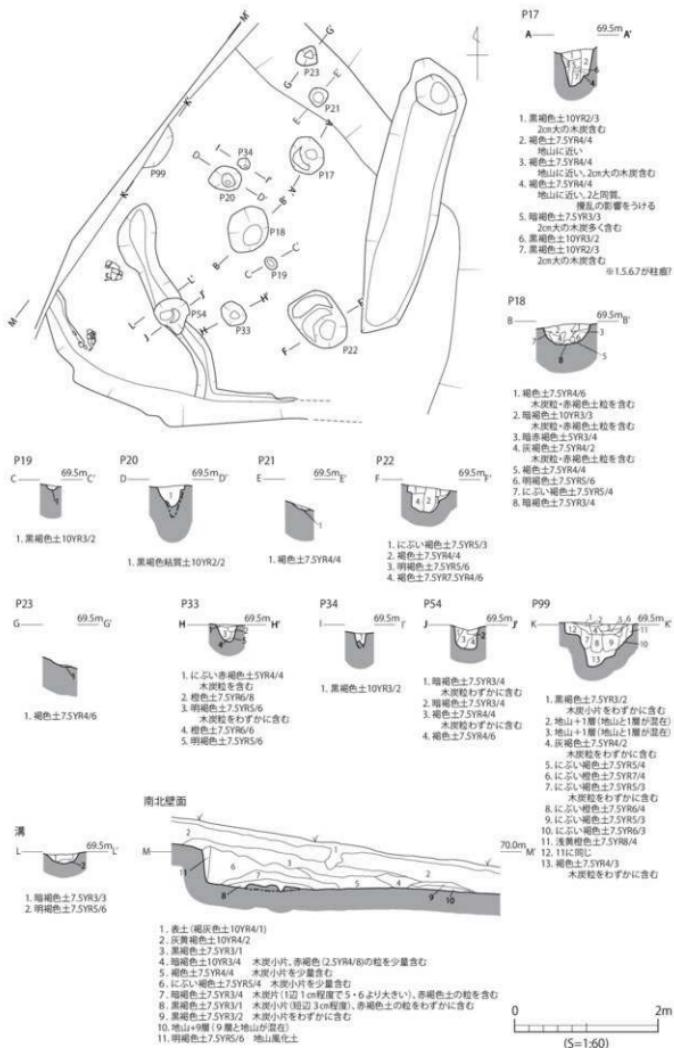
遺物は、床面、ピット(P17・18・20・22)、埋土から弥生土器が出土したが、小片で図示できず詳細な時期が不明のものもある。なお、遺構外出土の土器(第33図3・4)と同種と考えられる土器が5層と7層から出土した。また、出土状況を図示できなかつたが、床面南部の壁の近くで、床面よりわずかに高い位置から大型の石が出土している。平成25年の試掘調査では、トレーン4でこれと接合する石材を確認しているが、出土位置は土坑内となっている。今回の調査では土坑の存在は確認できなかつたが、石はSI02の廃絶後にこの位置に移動してきた可能性もある。



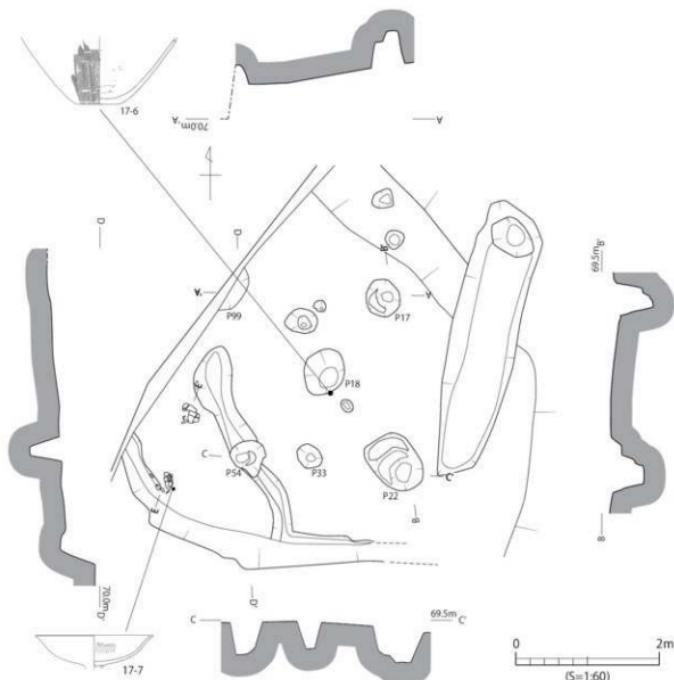
1. 暗褐色土7.SYR4/6
2. 黒褐色土7.SYR6/2 粒状木炭層?
3. 明褐色土7.SYR6/6 塗土層
4. 暗褐色土10YR4/4 3層の小ブロック・粒状木炭を含む
5. 暗褐色土10YR4/4 3層の小ブロックをわずかに含む。木炭はない
6. 淡黄色土7.SYR6/2
7. 淡黄色土7.SYR6/2 ブロックと明褐色土7.SYR5/6
8. 暗褐色土7.SYR6/6 淡褐色土7.SYR6/3が混在
9. 暗褐色土7.SYR4/6
10. 暗褐色土7.SYR3/3
11. 黑褐色土7.SYR3/3
12. 黑褐色土7.SYR3/3 赤変部分の掘り過ぎ
13. 明褐色土7.SYR3/3



第13図 SI01炉 実測図



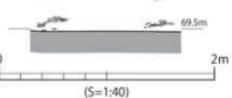
第14図 S102実測図(1)



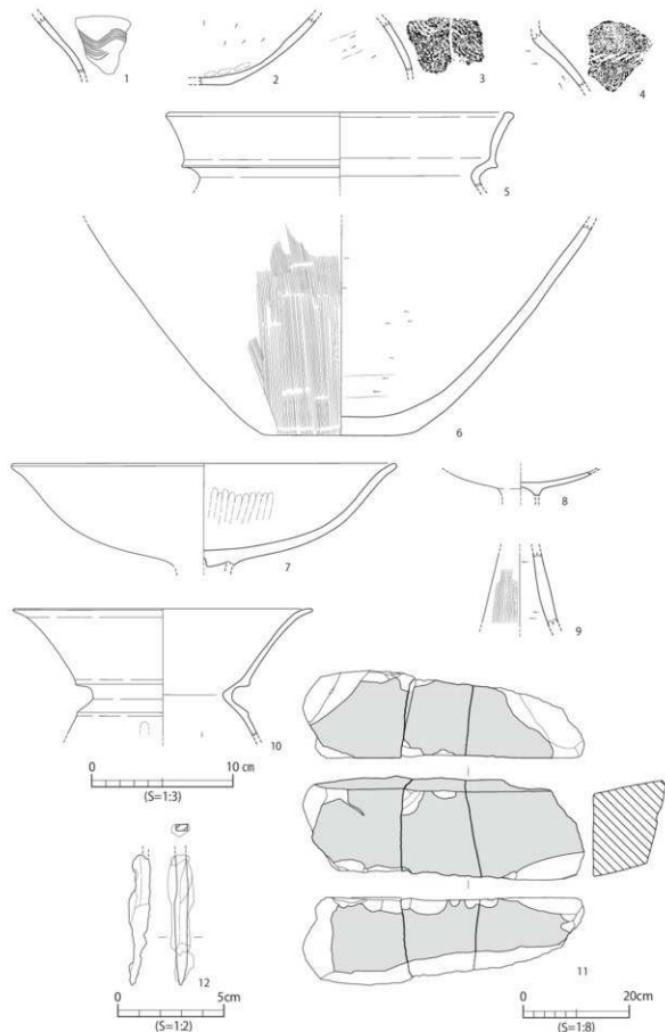
第15図 SI02実測図(2)

SI02出土遺物(第17図)

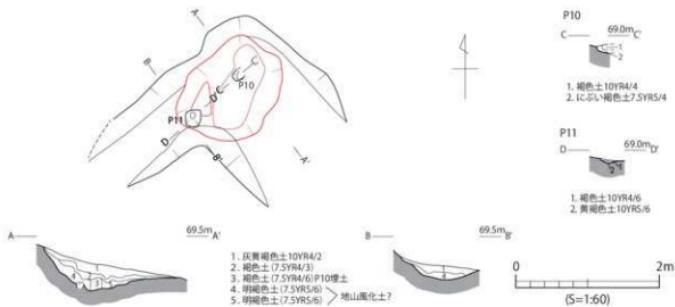
3・4は床面から出土した甕の肩部である。3はクシ描の波状文、4はヘラまたはハケメ状工具による連続刺突文が施される。5はP18出土のもので、口縁がわずかに外反し、口唇部が肥厚する。6はP18や床面出土の破片を接合した底部から体部の破片で、平底である。器壁は厚く、色調も異なることから5とは別個体であろう。7～9は埋土から出土したものである。7は高環で、底部外面には刺突痕と見られる小孔をもつ。8は高环もしくは低环、9は高环の脚部である。11は床面から出土した灰白色～淡橙色の石で、上面と両側面が磨滅して平滑になっており、砥石と考えられる。石材は流紋岩か。この石は3つの破片からなるが、図の最も左の破片は、平成25年の試掘確認調査で出土したものである。遺物の時期は3・4が草田4～5期、5・6が同4期、7・8は同5期と判断した。



第16図 SI02土器出土状況実測図



第17図 A区遺構出土遺物実測図



第18図 加工段1実測図

加工段1（第18図）

調査区南部、尾根筋からやや南に下った位置で検出された加工段で、床面の標高は69 mである。加工段の埋土は1層と2層で、3層はピット埋土、4・5層は床面に存在する落ち込みの埋土である。加工段の北西～北東側が残存し、検出した床面の規模は3 m × 2 mである。床面には、残存する壁面と平行して高低差約10cmの段差が認められ、幅1～2 mの浅い溝が存在するようにも見える。

ピットは床面で2基を検出した。北東側の1基は、土層確認用の溝を掘削した際に半分程度を失ったが、いずれも径20cm程度の小規模なものである。遺物は確認できなかった。

なお、床面では1.6 m × 1.2 m、深さ20cmの落ち込みを確認した。土層の堆積状況から、落ち込みは加工段の造成以前から存在していたことがわかる。埋土（4・5層）は地山風化土と考えられ、遺物も出土しなかった。落ち込みの底面は凹凸の多い不整形なものであることから、自然に形成された落ち込みが当初から存在し、それを埋めて加工段の床面を造成したものと見られる。

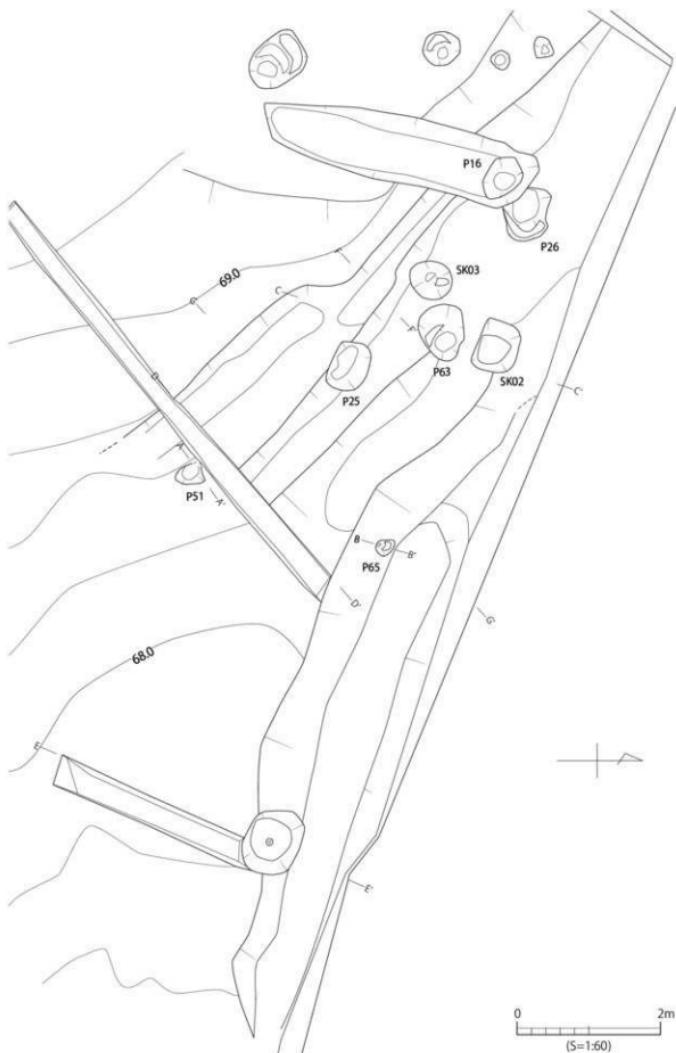
加工段2～6（第19図・第20図）

北斜面で検出された加工段である。遺構の南西部は加工段6を除いて流出しており、斜面の削平により形成された部分のみが床面として残存する。加工段の土層を見ると、標高が下位に位置する加工段が上位の加工段を切り込むものは認められない。一方、下位の加工段の埋土に貼り床を行い、上位の加工段を造成するものが存在することから、斜面下方のものが時期的に古く、標高が高くなるに従って加工段の時期が新しくなると考えられる。

なお、加工段が存在する斜面で検出されたピットは、径20cm程度の小型のものと、径60cmを超える大型のものが存在するが、小規模なものを加工段に伴うものと考えた。

加工段2

北斜面の加工段群のうち最も上方に位置し、床面の標高は68.7 mである。上端は北西に位置する加工段3につながる。検出した床面は3 m × 0.2 mである。土層観察で、貼り床が確認できる（第20図D-D'）。東側で検出されたP51が、この加工段に伴う可能性がある。遺物は出土していない。



第19図 加工段2～6実測図

加工段3

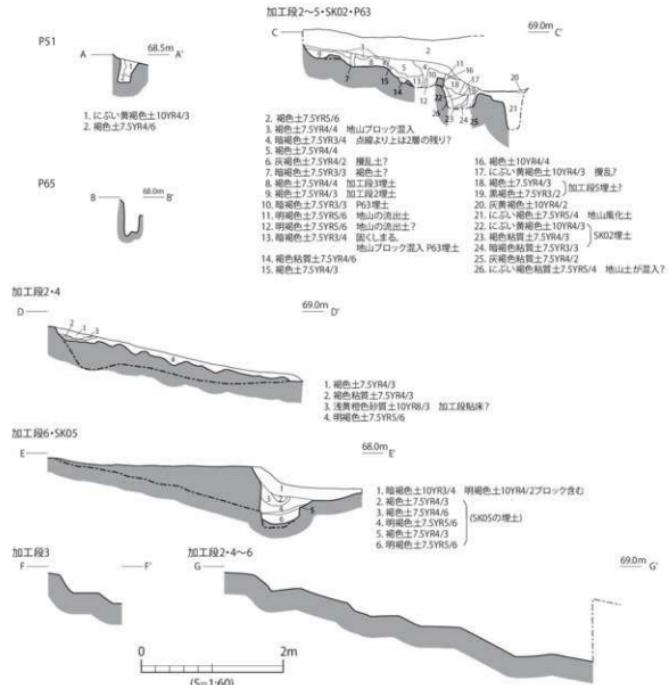
加工段2の北西部に隣接する。床面は加工段2よりわずかに低い。地山の流出などのため、確認できる床面は2.4m×0.3mである。遺物は出土していない。

加工段4

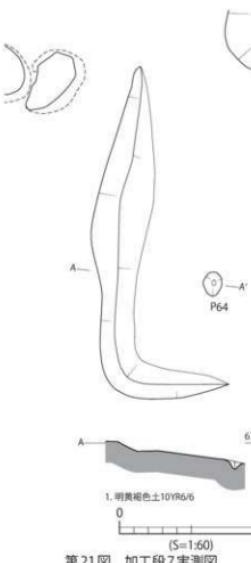
加工段2・3の下方に位置し、床面は加工段2より40cm低い。SK02・SK03付近から北西は緩やかに移行しており、床面と見られる範囲は4m×0.2mである。図示できなかったが、弥生土器と見られる小片が埋土から出土している。

加工段5

加工段4の下方に位置し、床面は加工段4より10cm程度低い。流出などのため、確認できる床面は3m×0.6mである。北東で検出されたP65が、この加工段に伴う可能性がある。遺物は出土していない。



第20図 加工段2～6土層図・断面図



第21図 加工段7実測図

加工段6

北斜面で検出した加工段の中で最も北側で、標高67.7mと最も低い位置にある。検出した床面は5.6m×0.8mで、北斜面に存在する加工段の中で、最も規模が大きい。これに伴うビットは確認できなかった。図示できなかったが、弥生土器と見られる小片が埋土から出土している。

加工段7（第21図）

A区東部で検出した加工段で、尾根筋近くに位置する。遺構は大部分が失われており、西側～南側の壁及び溝の一部のみ確認した。床面としての平坦面は存在しないが、溝の範囲から少なくとも4.6m×2mの規模である。床面の範囲からビット1基（P64）を検出しており、加工段7に伴うとみられる。遺物は出土していない。

柱穴列（第22図～24図）

A区北西斜面で検出したビットのうち、P16・P25などは竪穴建物の主柱穴と同程度の規模をもち、土層に柱の痕跡が認められるものも存在する。加工段の方向や床面と位置関係が整合しないことから、柱穴列を想定した。P25～SK03～P16は等高線と並行しており、芯々距離が1mで、ビット底面の標高もほぼ一致する。P63～P26も芯々距離1.4mで柱穴列の可能性がある。土層観察や検出状況から、これらの柱穴列は、加工段が形成される以前にこの斜面に存在した掘立柱建物の一部と考えられる。

柱穴列出土遺物（第17図）

第17図12はP26から出土した鉄器で、釘とみられる。

SD01（第25図）

北西斜面からSI02の床面にかけて検出した溝で、切り合い関係から加工段3・加工段4・P16に後出する。検出時の平面形から溝状遺構としたが、底面は凹凸があり、下端のラインも不明確である。規模は長さ4m、幅0.9m、深さ0.1mである。遺物は鼓形器台の破片が出土した。

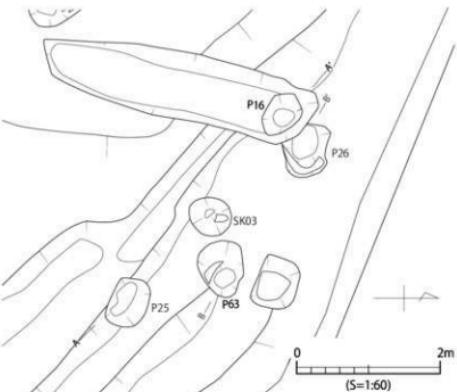
SD01出土遺物（第17図）

第17図10は鼓形器台で、全体に風化している。上台が直線的にのび、端部が外反する。文様は認められない。時期は草田4期と考えられる。

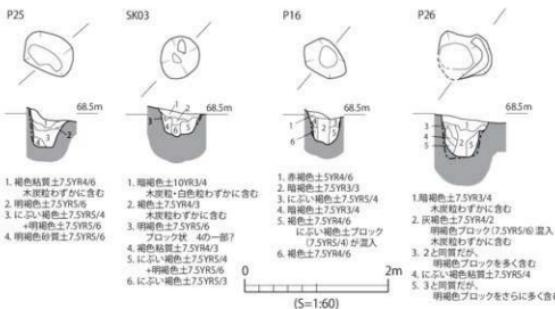
SD02（第26図）

A区南西部の尾根筋で検出した直線的な溝で、等高線にほぼ平行する。検出面の標高は70.2～70.5mで南側がわずかに高い。規模は長さ5.5m、幅40～60cm、深さ20～30cmである。周辺では多数のビットを確認した。切り合いで確認できたものを見ると、SD02がビットに先行する。遺物は出土していない。

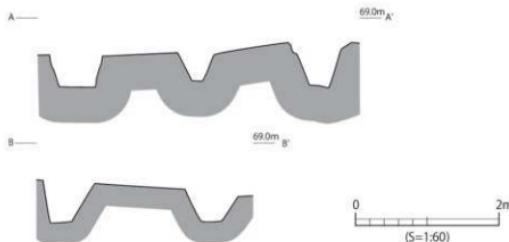
溝の堀方が両端まで明確で、屈曲も認められることから、布掘建物の可能性がある。



第22図 柱穴列実測図



第23図 柱穴列土層図



第24図 柱穴列断面図

A区検出土坑（第28図）

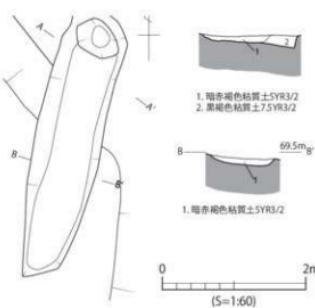
この跡跡で土坑としたのはSK01～07の7基であるが、SK02・03については先述したので、残る5基について記す。

SK01

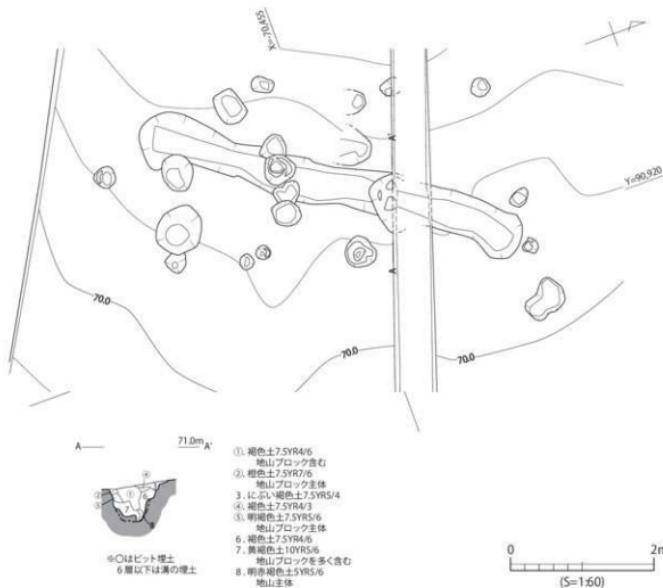
A区南東部で検出した土坑で、長径90cmである。埋土には10cm大の礫を含む。A区南東部では、地山に礫を含むことから、埋土中の礫もこれが再堆積したものであろう。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SK04

A区南東部、SK01の北西1.5mで検出した土坑である。平面形は1.6m×0.6mの長方形で、長軸が等高線に直交する。深さは西側で0.8mで、底面は水平である。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、埋土の性状から近年に掘



第25図 SD01実測図



第26図 SD02実測図

削された可能性が高い。

SK05

A区北東部、尾根上から斜面に移行する付近で検出した土坑である。平面形は長径1m×短径0.8mの楕円形で、深さは南側で1.1mである。底面は径0.6mで、中央に径10cm、深さ30cmの小孔を設ける。形状から落し穴と見られ、遺物は出土していないが、時期は縄文時代である可能性が高い。

SK06・07

A区北東部、尾根上で検出した土坑で、2基は隣接して切り合う。当初SK06のみを検出・調査し、SK07の存在に気づいたのはその後だったため、土層観察による前後関係は行えなかった。

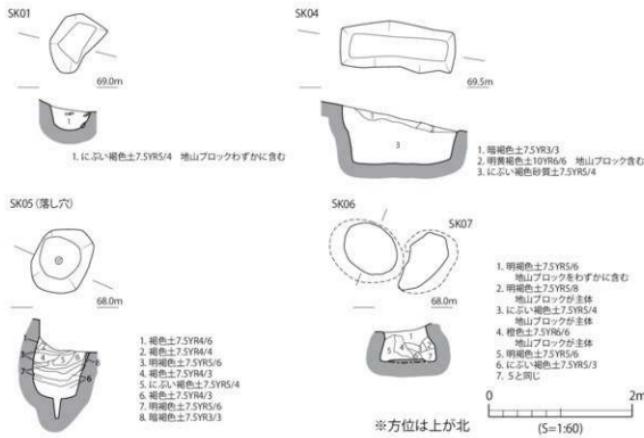
SK06は、上端の長径0.8m、短径0.6mの平面楕円形である。下端は長径1.1m、短径0.8mで検出面より大きくなる袋状土坑である。図示できなかったが、弥生土器と見られる小片が出土している。SK07は、SK06とほぼ同じ規模であるが、長軸はSK06と直交する。SK07も袋状土坑で、調査員の不手際により土層断面図を作成できなかったが、調査時の記憶では底面はSK06よりわずかに高かった。SK07では遺物は出土していないが、SK06・07は弥生時代以前のものと考えられる。



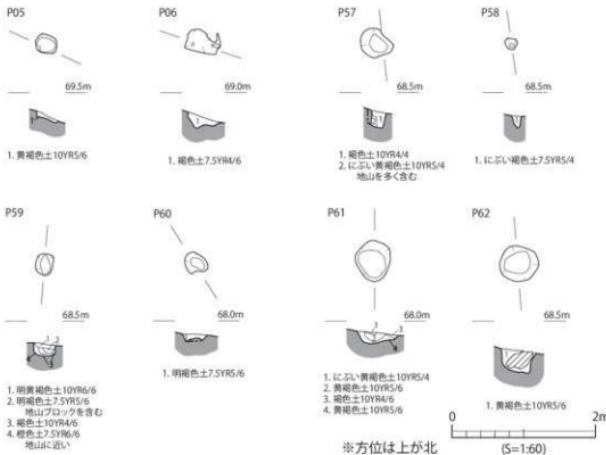
第27図 SK01・04～07・A区東部ビット位置図

A区東部ピット（第29図）

A区東部、尾根上から南側斜面にかけてピットを検出した。ピットはその規模から1. 長軸（または一辺）60cm前後の大型のもの、2. 長軸（または一辺）30cm前後の小型のものがあり、後世に地



第28図 SK01・04～07実測図

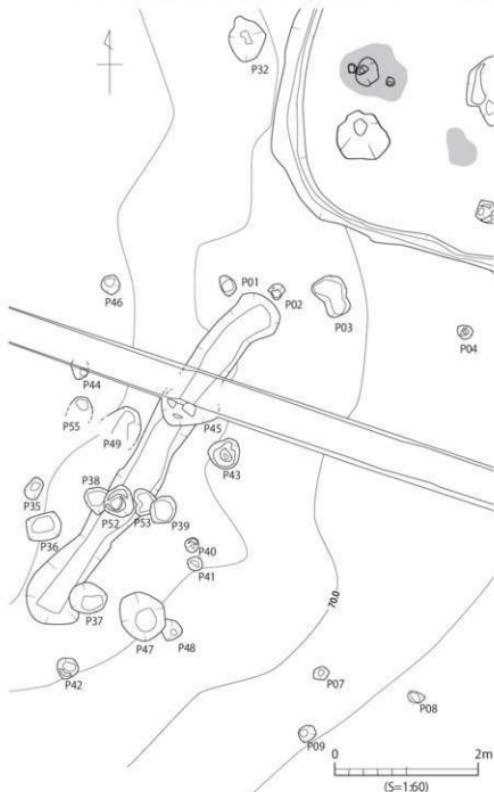


第29図 A区東部ピット実測図

山が流出したためか、比較的浅いビットがほとんどである。平面的な位置関係には有意なものは認められない。P59・P62には埋土中にビットの径に近い石を含んでいたが、石への加工は確認できず、SK01と同様に自然石が埋没した可能性が強い。

A区南西部ビット（第30・31図）

A区南西部の尾根上から南側斜面にかけて、S101南西からSD02の周辺でビットを多数検出した。ビットはその規模から1. 長軸（または一辺）40cm前後、深さ40cm前後と大型のもの、2. 平面形は1と同程度であるが、浅いもの、3. 長軸（または一辺）20cm前後、深さ10～20cmの小型のもの、に分けることができよう。このうち1については、SD02付近に集中する。P45など明らかに柱穴と認められるものもあり、豊穴建物・掘立柱建物や、溝内に柱穴が配される布掘建物の可能性も



第30図 A区南西部ビット位置図



第31図 A区南西部ピット実測図

考えたが、有意な配置や列は想定できなかった。遺物が出土しておらず、時期は不明である。切り合いで関係からSD02に後出するとみられるが、SD02との時期差はあまり大きくないのではないか。2についても遺物は出土していないが、P47では採取した木炭からC14年代測定で13世紀代の値を得ている。3はA区南部の広い範囲に点在する。遺物は出土しておらず、時期は不明である。検出できなかったが、本来は加工段が存在していたことも否定できず、それに伴うビットの可能性も考えられる。

SX01 (第32図)

A区の北東隅で検出した遺構である。南北2.8m×2.4mの大型の土坑状で、埋土はしまりがなく掘削や擾乱が繰り返されたと考えられる。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

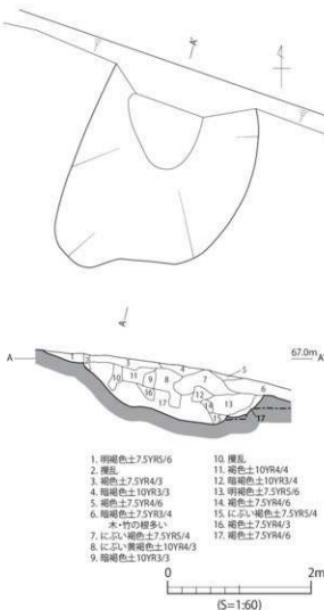
A区遺構外出土遺物 (第33・34図)

遺構外の出土遺物も少量であるが、各時代のものが出土した。土器は風化が進み、文様や調整は不明なものがほとんどである。

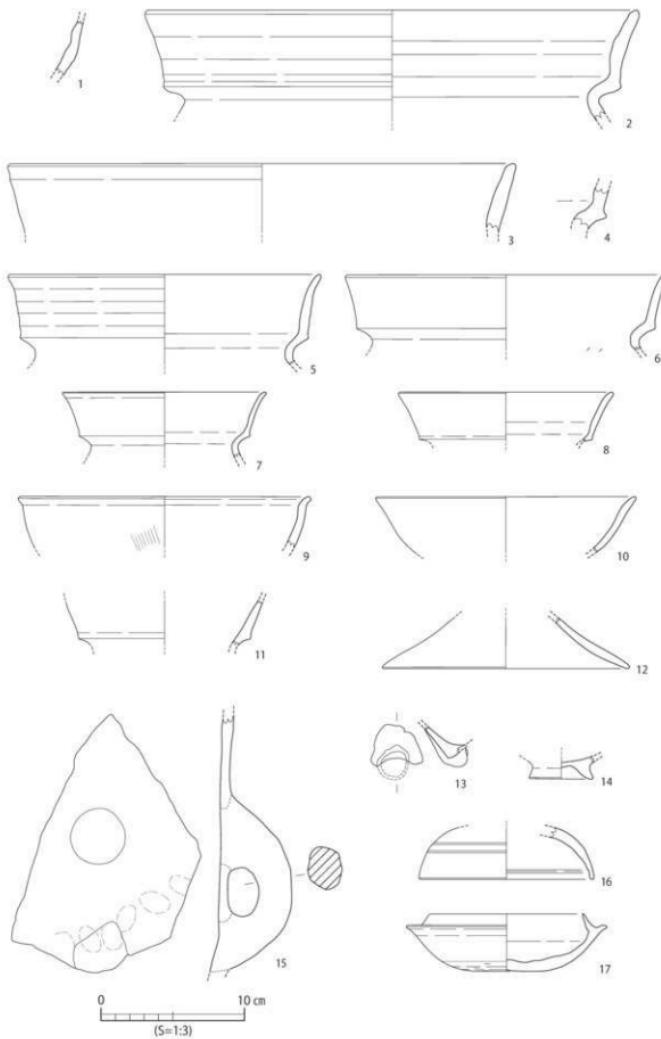
1は縄文土器で、粗製の深鉢である。2～14は弥生土器と見られる。2は大型の壺で、口縁がわずかに外反する。3は口縁端部で、大型の壺または壺とみられる。調整・文様は風化のため不明である。器壁が厚く色調はにぶい黄橙色で、4も大型の土器の頸部～口縁部で、胎土・色調から3と同一個体の可能性が高い。5～8は壺の口縁で、風化のため文様の有無は不明である。9は口縁端部が外側へ屈曲するもので、鉢と考えられる。10は高环の环部とみられる。11は鼓形器台であろう。13は風化が著しいが、注口とみられる。12は高环の脚部であろう。14は低脚环の脚部か。15は椭形土器の把手で、いわゆる山陰型椭と考えられる。16・17は須恵器の环蓋と环身で、南北トレンチの第3層から出土した。16は口径12.0cmで、口縁端部や上方に沈線を巡らせ、肩部には2条の沈線が施される。17はかえりが先端に向かい細くなる。底部付近は回転ヘラケズリである。

第34図1は黒曜石製の剥片である。2は碧玉質の剥片で、表土から出土したものである。長軸の一方の先端付近に敲打痕が見られる。3は短刀で、目釘孔1カ所と、錐が認められる。

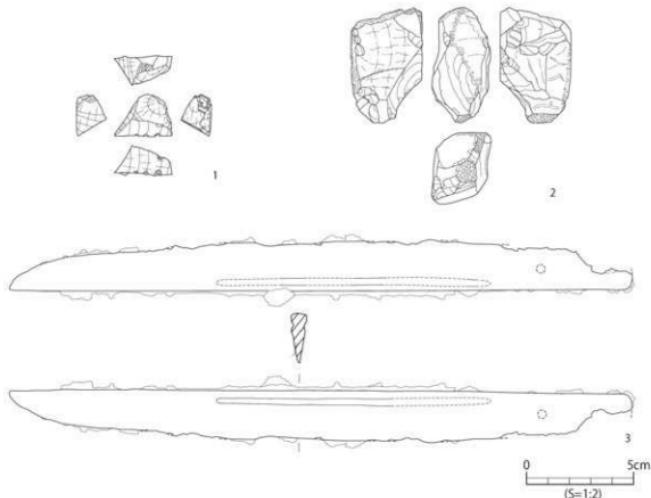
時期は、1が縄文時代後期～晩期、2・5～8・11は草田5期と考えられる。3・4については、図示できなかったがSD02の5層・7層から同一個体と見られる土器が出土しており、草田5期か。9は弥生時代後期と見られる。14・15は出雲須恵器編年の出雲4期と考えられる。



第32図 SX01実測図



第33図 A区遺構外出土遺物実測図(1)



第34図 A区遺構外出土遺物実測図(2)

第4節 B区の検出遺構とその遺物

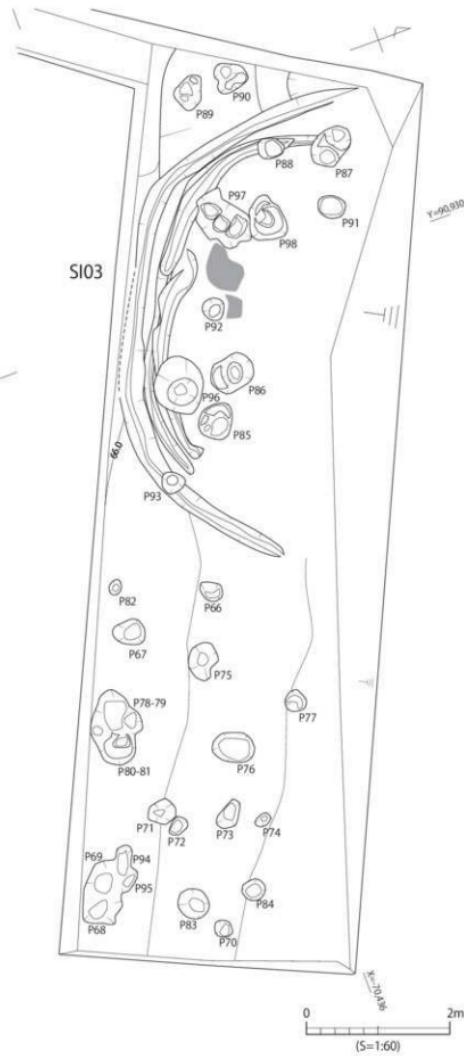
B区は、A区北斜面の中腹にあるごく緩やかな斜面に位置し、標高は66mでA区との比高差は1.5mであるが、竪穴建物の西側は中央部～南部より約50cm高くなっている。検出した遺構は、北西部に位置する竪穴建物1(SI03)、B区全域で検出したピット約20である(第35図)。

SI03(第36・37図)

B区の北西部で検出した竪穴建物で、床面の標高は65.6～65.7mである。北東部での地山の流出のため、遺構の1/3程度を検出したことにとどまる。

床面では壁際溝4本が重複しながら検出されており、少なくとも2回の建て替えが行われている。切り合い関係から最も内側の壁際溝が古く、建物の床面を埋めながら、規模を徐々に拡張していることがわかる。平面形は、古い時期は隅丸方形の可能性があるが、新しいものは多角形になっている。主柱穴は、壁際溝との位置関係から古い順に1.P98-P86、2.P85-P92-P98、3.P87-P97-P96を想定した。1.は4本柱、2.、3.は5本以上の柱を持ち、平面多角形の床面に対応するものであろう。いずれの配置であっても、中央ピットと見られるピットは認められなかった。床面では主柱穴のほかにも多くのピットを検出しており、土層から柱穴と考えられるものもあるが、床面の多くが失われていることから、SI03に伴うピットの判別は困難である。SI03周辺でもピットを多数検出しており、それらと同種のものであろう。

このほか、床面ではP97南東からP92付近にかけて焼土を検出した。検出した高さから、最も新

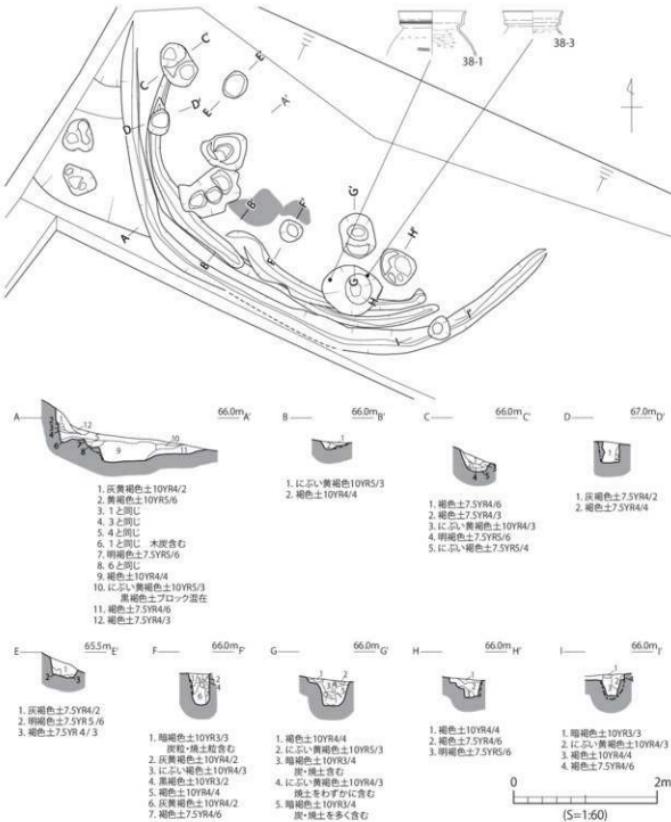


第35図 B区遺構位置図

しい段階の建物に伴うものとみられる。

S103出土遺物（第38図）

1は甕で、全体に風化が進んでいるが、口縁部外面の一部に平行沈線が認められるほか、肩部に連続刺突文が施される。平行沈線は貝殻腹縁によるもので、口縁部外面の広い範囲にあったと考えられる。刺突文の工具も貝殻腹縁であろう。2も甕である。P86から出土したもので、口縁部を上に正立した状態で検出した。口縁部外面には平行沈線が認められる。器形は、1・3と比較すると口縁端部の外反が大きく、肩の張りもやや強く見える。3も甕で、器形は1と同様である。風化のため施文は確認できない。4は高杯の脚部であろう。5は鼓形器台か。6は高杯とを考えた。



第36図 S103実測図(1)

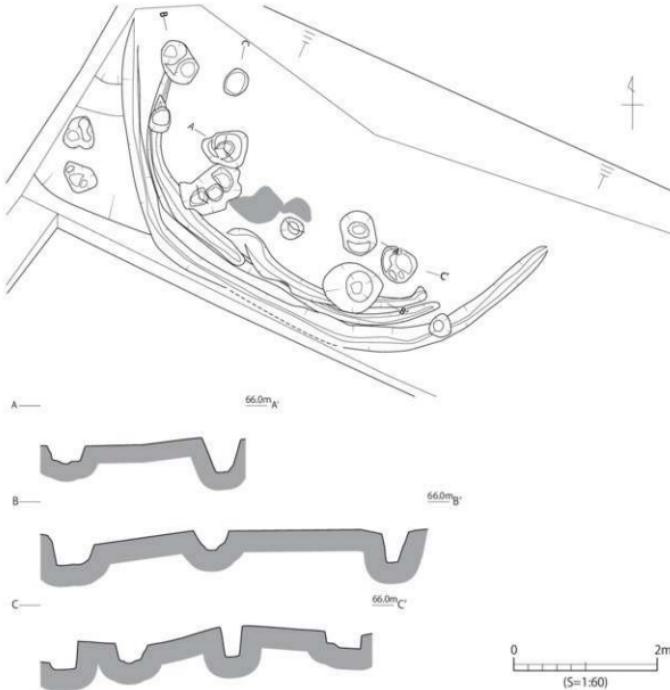
遺物の時期は、甕の口縁部に平行沈線が認められるものもあるが、形態的な特徴から草田4～5期と考えられる。

B区検出ピット（第39図）

B区では、調査区全域でピットが検出されている。ピットの規模は大小があるが、SI03の残存状況を考えると、緩斜面下方にあたる北側は地山を含め土砂が流出したと見られる。このため、ピット底面の高さを比較してみると、東側に位置するものは底面のレベルが低い傾向がある。また、P78、P81など柱穴と考えられるピットも存在するが、有意な配置は認められず、掘立柱建物などを想定するのは困難である。

ピット出土遺物（第38図）

遺物は、P67～P69・P81で出土している。いずれも概ね弥生時代後期後半のものと考えられる。小片が多く、図示できたのは次のものである。

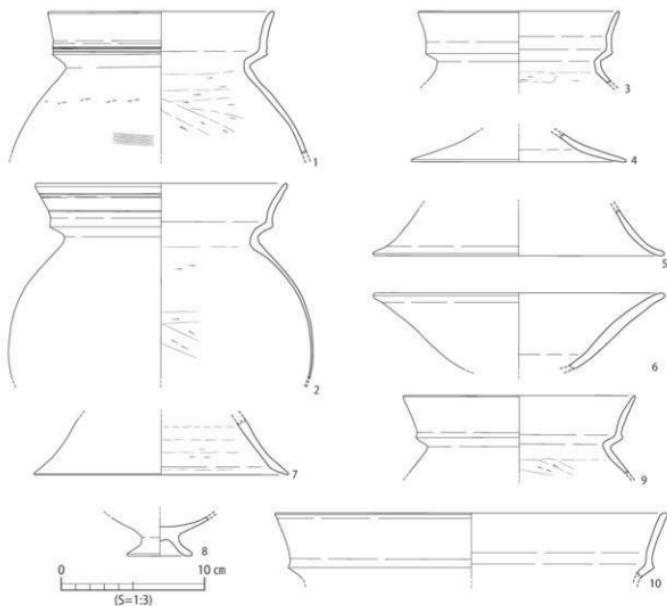


第37図 SI03実測図(2)

7はP67から出土した土器で、鼓形器台の脚台部であろう。文様は認められない。SI03で出土した第38図5よりも、径に対する器高の比率が高くなるものとみられる。8はP69から出土した器壁の厚い低脚環で、口縁部を欠く。時期はいずれも草田4～5期と考えらえる。

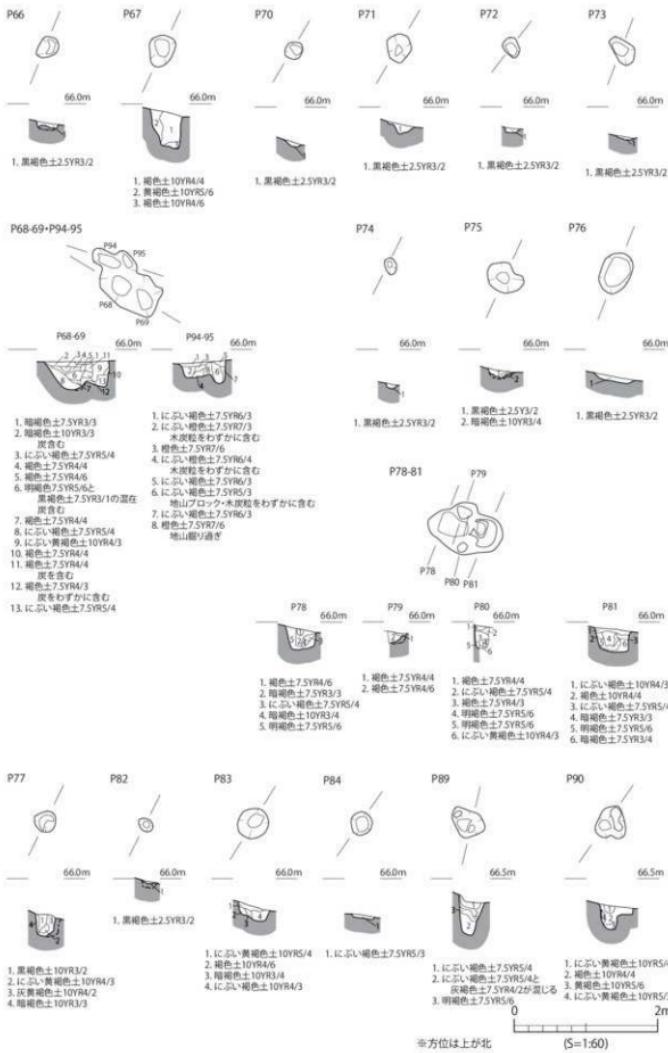
遺構外出土土器（第38図）

遺構外出土であるが、出土位置から、2点ともSI03の覆土に含まれていた可能性がある。9は甕で、口縁部は外傾し、先端は細くなり丸くおさめる。風化のため文様は不明である。10は甕の口縁で、口縁端部には不明瞭ながら平坦面がみられる。時期は9が草田5期、10は草田6期か。



第38図 B区出土遺物実測図

第3章 調査方法と成果



第39図 B区ピット実測図

第4章 自然科学分析

宮尾Ⅲ遺跡発掘調査に伴う樹種同定及びAMS年代測定

渡辺正巳：文化財調査コンサルタント（株）

はじめに

宮尾Ⅲ遺跡は、島根県東部、安来市広瀬町広瀬に位置し、広瀬市街地西方の三笠山（標高218.1m）の山腹に立地する。

本報は、文化財調査コンサルタント株式会社が、検出された遺構の年代及び建築部材の可能性がある炭化材の樹種を明らかにする目的で、島根県教育府理藏文化財調査センターからの委託を受け、実施・報告した樹種同定及びAMS年代測定の報告書を再編したものである。

分析試料について

分析試料は、島根県教育府理藏文化財調査センターにより採取・保管されていた試料から御提供を受けた。

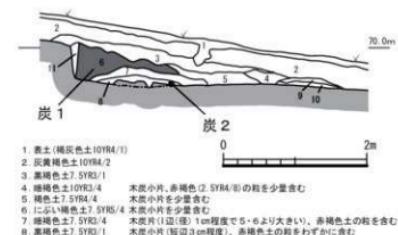
第1図に調査区平面図（試料採取地点）、第2～4図に各地点の断面図（試料採取位置（層準））を示す。また、これらの図面類は、島根県教育府埋蔵文化財調査センターより御提供を受けた原図をもとに、作成した。



分析方法

(1) 樹種同定方法

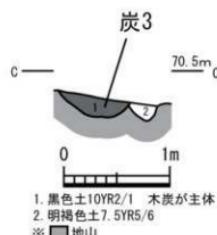
A—



第2図 縫穴建物2断面図
(炭1、炭2試料採取位置・層準)
炭1は6層から採取

第1図 調査区平面図(試料採取地点)

T1.0m K



第3図 P47断面図
(炭3試料採取層準)
炭3は1層から採取(位置不明)

渡辺(2020)に従って観察資料の調整を行い、₀—走査型電子顕微鏡下で観察・同定を行った。

また、同定した分類群ごとに最も特徴的な試料について、顕微鏡写真撮影を行うとともに、島地ほか(1985)の用語に基本的に従い、記載を行つた。

(2) AMS 年代測定方法

塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度酸洗浄を行つた。この後、二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した。14C濃度の測定にはタンデム型イオノン加速器を用い、半減期：5568年で年代計算を行つた。層年代較正にはOxCal ver. 4.4(Bronk Ramsey, 2009)を利用し、INTCAL20 (Reymer et al., 2020)を用いた。

分析結果

(1) 樹種同定結果

樹種同定を行つた2試料ともにシイノキ属であった。以下に、代表的な試料(炭2)の記載を行うとともに、電子顕微鏡写真を第5図に示す。

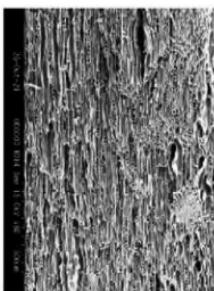
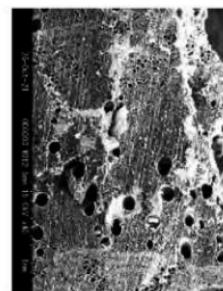
シイノキ属 *Castanopsis* sp. No炭1、2

記載(炭2)：環孔性の放射孔材である。孔圈の道管は疎で、大きい梢円形の道管が単独で放射方向に配列する。孔圈外の道管は急激に小さくなり、火炎状ないし放射状に配列する。道管せん孔は单せん孔で道管内腔にはチロースが認められる。孔圈道管の周りには周囲仮道管が存在する。軸方向柔細胞は多く、散在状ないし單接線状に分布する。放射組織は平伏細胞からなる単列同性である。



第4図 緯穴建物1炉断面図
(炭4 試料採取層準)

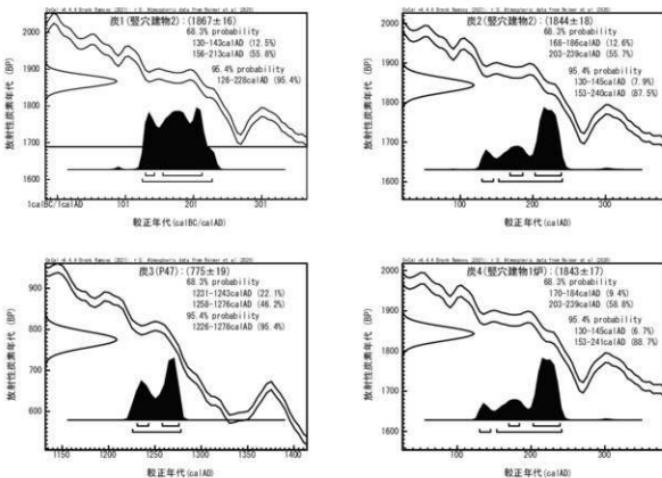
炭4は4層から採取(位置不明)



第5図 電子顕微鏡写真
(炭2:シイノキ属 左:横断面 中:接線断面 右:放射断面)

第1表 年代測定結果

試料番号	調査区	出土地点 (遺構ほか)	状況	重量(g)	測定時期	前処理		測定番号
						粗目流水洗浄 有機溶剤脱脂:アセトン 繩・アルカリ・酸洗浄(温度:128K, 水酸化ナトリウム:1.0N, 硫酸:1.2N)	粗目流水洗浄 有機溶剤脱脂:アセトン 繩・アルカリ・酸洗浄(温度:128K, 水酸化ナトリウム:1.0N, 硫酸:1.2N)	
炭1	竪穴建物2	6層	炭化材 (シイノキ属)	0.1505	-			PLD-44315
炭2	竪穴建物2	床面直上	炭化材 (シイノキ属)	0.1277	-			PLD-44316
炭3	-	P 4.7 1層	炭化材	0.0815	-			PLD-44317
炭4	竪穴建物1	鉢 4層	炭化材	0.083	-			PLD-44318
試料番号	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	$\delta^{14}\text{C}$ 補正無年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	測年較正無年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	${}^{\text{14}}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	${}^{\text{14}}\text{C}$ 年代を基年代に較正した年代範囲			
					100年位年代範囲	200年位年代範囲		
炭1	-25.53 \pm 0.33	1876 \pm 16	1867 \pm 16	1865 \pm 15	130-143 cal AD (12.5%) 156-213 cal AD (55.8%)	126-228 cal AD (95.4%)		
炭2	-25.83 \pm 0.44	1859 \pm 17	1844 \pm 18	1845 \pm 20	108-186 cal AD (12.0%) 203-239 cal AD (55.7%)	130-145 cal AD (7.9%) 153-240 cal AD (87.5%)		
炭3	-23.88 \pm 0.47	757 \pm 18	775 \pm 19	775 \pm 20	1231-1243 cal AD (22.1%) 1258-1276 cal AD (46.2%)	1226-1278 cal AD (95.4%)		
炭4	-26.32 \pm 0.32	1866 \pm 17	1843 \pm 17	1845 \pm 15	170-184 cal AD (9.4%) 203-239 cal AD (58.8%)	130-145 cal AD (6.7%) 153-241 cal AD (88.7%)		



第6図 歴年較正結果

る。

以上の組織上の特徴からシイノキ属と同定した。また広放射組織が認められないことから、スタジイの可能性が指摘できる。

(2) AMS 年代測定結果

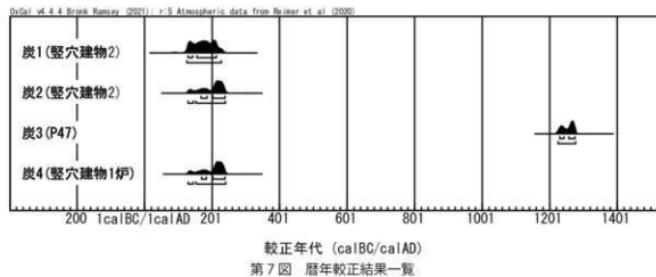
年代測定結果を第1表、第6図に示す。

第1表には、試料の詳細、前処理方法、 $\delta^{13}\text{C}$ 値と4種類の測定年代を示している。第6図にはINTCAL20 (Reymer et al., 2020) を用いた暦年較正結果を示した。また、確率分布と σ 、2 σ の構成範囲を示している。

年代測定値について

第7図に示したように、2棟の竪穴住居に関連した試料からは3世紀初めを中心とした年代測定値が得られ、弥生時代後期の住居であったと考えられる。

一方、P47は鎌倉時代の年代値が得られた。ピット内の詳細な採取位置が不明であり、断言はできないもののP47が鎌倉時代の遺構である可能性は高い。



第7図 暦年較正結果一覧

用材について

樹種同定結果はシイノキ属であった。

炭1、2はそれぞれ床面上位の6層、竪穴建物の床面直上から得られており、竪穴建物の建築部材の一部（焼失建物の部材）と考えられる。島根県下の弥生時代（可能性のある試料を含む）の分析結果では、シイノキ属はスギ、クリに次いで多い分類群であり（山田・伊東, 2012）、建築部材としては一般的な用途であったと考えられる。

今回調査が行われた安来市内での古植生については、花粉分析等の調査例が極少ないために詳細が不明である。一般的に想定される、島根県内弥生時代後期の古植生では、低山地は照葉樹林で覆われていたと考えられる。今回のシイノキ属は、照葉樹林の主要構成要素であることから、近辺に生育していたシイノキ類を伐採して竪穴建物を建築したと推定できる。

まとめ

宮尾Ⅲ遺跡で実施した樹種同定、年代測定の結果から、以下の事柄が明らかになった。

- 1) 年代測定の結果、竪穴建物は3世紀初め（弥生時代後期）を中心とした時期のものと考えられた。一方P47は、鎌倉時代のものと考えられた。
- 2) 検出された炭の樹種は、シノキ属であり、弥生時代の「建築部材」としては、一般的なものであった。
- 3) 同時期に遺跡周辺地域は照葉樹林の分布域であり、遺跡周辺に生育していたシノキ類を伐採して竪穴建物を建築したと推定できる。

引用文献

- 島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塙倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造. 276p., 文永堂, 東京.
- Bronk Ramsey, C. (2008). Deposition models for chronological records. Quaternary Science Reviews, 27(1-2), 42-60.
- Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- Reimer, P., Austin, W., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R., Friedrich, M., Grootes, P., Guilderson, T., Hajdas, I., Heaton, T., Hogg, A., Hughen, K., Kromer, B., Manning, S., Muscheler, R., Palmer, J., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R., Richards, D., Scott, E., Southon, J., Turney, C., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capello, M., Fahrni, S., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A., & Talano, S. (2020). The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). Radiocarbon, 62.
- 伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学 出土木製品用材データベース. 449p. 海青社, 滋賀.
- 渡辺正巳（2020）自然科学分析. 城山公園整備事業に伴う県史跡 浜田城跡発掘調査報告書, 90-94., 浜田市教育委員会, 島根.

第5章 総括

第1節 遺跡の立地と遺構

1 遺跡の立地

宮尾Ⅲ遺跡は、西側の山塊から続く標高約70mの尾根上及び斜面に位置する。飯梨川に面しており、広瀬の市街地が存在する平地との比高差は約40mで、下方の平地や飯梨川下流域への眺望が開ける。能義平野周辺では、弥生時代後期の集落は丘陵上や尾根上などに営まれる例が多いが、宮尾Ⅲ遺跡もこれに含まれるといえよう。当時は宮尾Ⅲ遺跡から中海までの距離はそれほど遠いものではなかったとみられる。

2 検出した遺構

落し穴 (SK05)

SK05は、規模・形状から落し穴と見られる。これに伴う遺物は出土していないが、縄文時代のものとみられる。周辺では、飯梨川対岸に位置する土居成遺跡や、上流に位置する普沢遺跡や経負坂古墳群、伯太川流域の安田深田遺跡、経塚鼻遺跡などでも確認されている。

島根県内の落し穴の分布を見ると、落し穴267基のうち、県東部に位置する出雲地方で90%以上が確認されている。その中でも宍道湖・中海沿岸に位置する安来市域・松江市域では合わせて102基が確認され、山間部の雲南市域・飯南町域・奥出雲町域の総数とほぼ同じである。

安来市の東に隣接する鳥取県は落し穴の確認例が約4000基と、全国的に見ても多く、鳥取県西部に位置する青木遺跡（米子市）など1遺跡での検出が200を超える例も見られる。このような隣接地域の影響が、安来地域など県東部で落し穴が多く検出される要因と考えられる。

竪穴建物

竪穴建物は、A区でSI01・SI02、B区でSI03の合計3棟を確認した。SI01・SI02はいずれも主柱穴が4基で、平面隅丸方形のものである。SI01では、床面西側で灰を検出した。鍛冶炉の可能性も考えたが、鍛造剥片など鍛冶関連遺物を検出することはできなかった。SI02では、床面近くで比較的大型の木炭が出土しているほか、柱穴・遺構埋土も焼土・木炭を含んでおり、焼失建物の可能性がある。この木炭はシイノキ属で、弥生時代後期の遺跡周辺地域の植生と矛盾しないことから、周辺に生育していたものを建築材として利用したものと推定される。（第4章参照）

SI03は当初は主柱穴4基であった可能性があるが、壁際構の検出状況から最低2回の建て替えが認められ、その過程で5基以上の主柱穴をもつ建物となっている。SI03の初期の主柱穴と考えられるP86からは、完形の土器が正立した状態で出土したが、何らかの祭祀的な意味合いを持つ可能性がある。

時期については概ね草田4～5期と考えられるが、細かく見るとSI02では、床面やピット内から草田4期の土器が出土しており、SI03ではP86出土土器にやや古い様相がみられることから、第3章で想定したようにこれが当初の主柱穴だと考えると、SI02と同時に存在した可能性もある。SI01についてはさらには出土遺物が少なく、SI02・SI03と概ね同時期と想定できるのみである。ただ、SI01は先後関係は不明ながら、位置的にSI02との同時併存は考えられない。同様に、布掘建物と想定したSD02とも先後関係がある。AMS年代測定では、SI01・SI02の時期はほぼ同一というデータが出

ており、一方が廃絶後、間を置かずに次の建物が建てられたと推定される。

溝状遺構（SD02）

SD02は、S101南東の尾根上に位置し、長さ5.5m、幅40～60cm、深さ20～30cmである。等高線に平行するように直線的に設けられ、両端まで明確に掘り込まれることから、竪穴建物や加工段に伴う溝とは考えにくい。

このような溝について能義平野周辺で類例を見ると、同程度の規模を持つ溝状遺構として弥生時代後期の布掘建物を挙げることができる。柳遺跡で検出されたSB01は、長さ5.4～5.7mの2本の溝が約4mの間隔で平行に掘り込まれており、時期は弥生時代後期後半から終末とされている¹⁾。渋山池遺跡では、弥生時代後期後半と見られるSB02が長さ6mの溝を持ち、溝内にある柱穴から桁行5.4m以上と推定している²⁾。経塚鼻遺跡でも、底面にピット4基が掘り込まれた長さ5.2mの溝が検出され、弥生時代後期の布掘建物が想定されている³⁾。SD02も、本来は斜面下方側に平行する溝状遺構が存在した可能性があり、溝の規模や形状から、布掘建物を想定することができるだろう。時期は出土遺物がなく、推定が難しいが、遺跡の中心時期である弥生時代終末をあてておきたい。

加工段・柱穴列・ピット

A区北斜面では加工段5基を検出し、柱穴列2列を想定した。加工段は斜面下方側の床面が流出して、地山に掘り込まれた部分のみが階段状に検出された。土層観察から斜面下方の加工段が先行し、新しい時期の加工段を上方に設けることを繰り返したと考えられる。

柱穴列はそれぞれ方向を異にし、位置的にも重なりあうことから2棟の掘立柱建物が先後関係をもって建っていたと考えられるが、2棟の新旧は不明である。

時期については、柱穴列は加工段に先行するもので、加工段の中にも造成時期の差があるため、一定の時期幅が存在する。時期を判断できる遺物が出土していないため、詳細は不明であるが、概ね弥生時代後期後半～終末と考えられる。

なお、A区SD02周辺とB区北西部・南東部で検出したピットにも柱穴と考えられるものが存在する。ピットの多くは所属時期が不明であり、配置や規模からは建物を想定することはできなかつたが、竪穴建物や加工段が存在した期間に、これらを柱穴とする施設が存在したことは十分に考えられる。

第2節 遺跡の評価

宮尾Ⅲ遺跡では、竪穴建物3・加工段7を検出したほか、布掘建物1・掘立柱建物2が想定される集落を確認した。時期は弥生時代後期後半～終末期（草田4～5期）である。広瀬地区では、縄文時代や古墳時代以降についてはある程度様相が明らかになっているが、弥生時代については、遺物の出土は認められるものの遺構については不明確であった。宮尾Ⅲ遺跡は、発掘調査で弥生時代の集落を確認した初めての事例である。

検出された遺構には時期差が認められるため、この集落に同時に存在した遺構の構成は竪穴建物1～2に掘立柱建物・加工段・布掘建物のいずれかまたは複数がセットになるものだったことになる。位置関係から、S101-S102には時期差があることは明らかで、S103は2回以上の建替えが行われている。北斜面では、掘立柱建物の廃絶後に加工段が設けられ、一定期間造成が続いている。遺構に時期差が認められることは、この集落がある程度の期間存続したこと示している。

第5章 総括

この集落の中心時期となる草田4～5期は、陽徳遺跡や岩屋口北遺跡など能義平野東側の丘陵上や山上の眺望が開けた立地に小規模な集落が出現する時期である。この背景として、弥生時代後期後半～終末、畿内・瀬戸内地方における争乱が収束した後、周辺地域であるこの地域への波及があつたと考えられている⁴⁾。

能義平野南部において、弥生時代後半期の集落の動向を知ることができる例として、伯太川中流域に位置する永昌寺の谷遺跡が挙げられる。この遺跡では、弥生時代中期後葉から弥生時代終末ないし古墳時代初頭までの集落が、継続的に確認されている。遺跡は伯太川西岸の標高60m～90mの尾根上に位置するが、集落の連続性などから陽徳遺跡などの山上集落ではなく、一般的のそれと考えられる。

集落の立地を見ると、弥生時代中期末～後期前葉には平地から離れた尾根の南西部に位置していたが、徐々に東へ移動し、弥生時代終末～古墳時代初頭（草田6～7期）には伯太川沿いの平地を望む北東部に立地を変えている⁵⁾。集落が伯太川沿いまで移動する時期は、能義平野周辺で山上集落が多く見られる草田5期よりも遅れるが、弥生時代終末期における占地の変化は興味深い。

宮尾Ⅲ遺跡については、竪穴建物・加工段に加え、掘立柱建物・布掘建物など多様な遺構が想定されることや集落が一定期間存続していることから、永昌寺の谷遺跡のような一般的な集落と考えておきたい。この集落が平地に近接し、飯梨川下流域に眺望が開ける尾根上に立地することは、能義平野縁辺に陽徳遺跡などの山上集落が出現する背景と無関係ではないだろう。高地性集落の性格を持つ山上集落のみならず、一般的な集落においても、当時の社会情勢に対応するため平地にした眺望の良い丘陵上や尾根上に占地する可能性は十分にあり、宮尾Ⅲ遺跡もその一つであったのではないかと考えられる。

註

- 1) 島根県教育委員会『塩津丘陵遺跡群』1998
- 2) 島根県教育委員会『宍山池遺跡・原ノ前遺跡』1997
- 3) 安来市教育委員会『経塚跡遺跡発掘調査報告書』2006
- 4) 島根県教育委員会『陽徳遺跡・平ラⅠ遺跡』1995
- 5) 安来市教育委員会『永昌寺の谷遺跡 高倉遺跡』2008

参考文献

- 広瀬町教育委員会『経負坂古墳群』2001
伯太町教育委員会『安田深田遺跡発掘調査報告書』2002
安来市教育委員会『土居城遺跡発掘調査報告書』2007
福田陽介・柳浦俊一「9.島根県・島根県の落穴集成」『山陰地方の縄文社会』島根県古代文化センター 2014

第3表 宮尾三遺跡出土土器観察表

調査番号	実測面積	取土量	地区	グリッド	遺物種類	層位	種別	断面	内径(横)mm	内径(縦)mm	底	地質	地質	色調	調査・手法の特徴	備考	
17-1	24-1	A	C2	S01 P31		弥生土器	直	良好	直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:浅黄色 10YR 8/4 内部:白色 10YR 8/2	外縁:ナチュラル 内部:ベニケズリ	測定?			
17-2	24-1	7	A	C2	S01	弥生土器	直	良好	直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:にじく黄緑 10YR 6/4 内部:浅黄色 7.5YR 8/4	外縁:ナチュラル 内部:ベニケズリ、指擦れ痕	草田4~5畠?			
17-3	24-1	A	C1	S02 2層 基盤土		弥生土器	直	良好	やや粗(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:浅黄色 10YR 4/2 内部:白色 10YR 8/2	外縁:ナチュラル 内部:ベニケズリ	測定? 草田4~5畠?			
17-4	24-1	A	C1	S02 2層 基盤土		弥生土器	直	良好	直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:にじく黄緑 10YR 7/4 内部:にじく黄緑 7.5YR 7/4	外縁:ナチュラル 内部:ベニケズリ後ナチュラル	測定? 草田4~5畠?			
17-5	24-1	A	C1	S02 P18		弥生土器	直	D4(B)	直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:にじく黄緑 7.5YR 7/4 内部:にじく黄緑 7.5YR 7/4	外縁:ヨコナメ 内部:ヨコナメ	草田4~5畠			
17-6	24-2	5	A	C1	S02 P18 3層 基盤土		弥生土器	直	良好	やや粗(2~3mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:白色 10YR 6/8 内部:白色 10YR 6/8	外縁:ハク、ハク後ナチュラル 内部:ナチュラル無ナチュラル	草田4畠		
17-7	24-2	1	A	C1	S02 4層 基盤土		弥生土器	高坪	270	直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	外縁:にじく黄緑 10YR 7/4 内部:にじく黄緑 10YR 7/3	外縁:ナチュラル 内部:ナチュラヘルミガマ	剪開部とらわしもあり 草田4~5畠			
17-8	24-1	A	C1	S02 2層 基盤土		弥生土器	高坪 低窪地	良好	直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:にじく黄緑 10YR 6/3 内部:浅黄色 10YR 8/4	外縁:ナチュラル 内部:ナチュラル	草田4~5畠			
17-9	24-1	A	C1	S02 6層 基盤土		弥生土器	高坪	良好	直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:白色 7.5YR 7/6 内部:白色 7.5YR 7/6	外縁:ハク、オナ 内部:ベニケズリナチュラル				
17-10	24-4	12 15	A	C1	S001		弥生土器	鋸歯状	D1(B)	直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	良好	外縁:白色 7.5YR 7/6 内部:浅黄色 7.5YR 7/6	外縁:ナチュラミキナキ 内部:ナチュラヘルミカツリ	草田4~5畠		
33-1	25-2	A	B1	褐色土		縄文	深鉢	良好	直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:にじく黄緑 10YR 7/2 内部:にじく黄緑 10YR 7/2	化粧のため不規則	黒野~鶴間			
33-2	26-1	3	A	C1	2層 粘土層		弥生土器	直	D4(B)	直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	良好	外縁:白色 7.5YR 7/6 内部:白色 7.5YR 7/6	外縁:ヨコナメ 内部:ヨコナメヘルミカツリ	草田5畠		
33-3	25-2	A	C1	表土? 2層		弥生土器	直(たまに砂) 直	D5(B)	直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:にじく黄緑 7.5YR 6/4 内部:白色 7.5YR 6/4	外縁:高野のため不規則 内部:高野(地盤の不規則)	草田5畠?			
33-4	25-2	A	3~4階			弥生土器	直?		直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:にじく黄緑 7.5YR 6/4 内部:にじく黄緑 7.5YR 6/4	外縁:高野のため不規則 内部:高野のため不規則	133-12第一番 のため不規則 草田5畠?			
33-5	25-2	9	A	D1	褐色土	弥生土器	直	D1(B)	直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:白色 7.5YR 6/6 内部:白色 7.5YR 6/6	外縁:ヨコナメ 内部:ヨコナメ、ナチュラル	草田5畠			
33-6	25-2	A	B2	2層 砂土層		弥生土器	直	D2(B)	やや粗(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:にじく黄緑 10YR 8/3 内部:浅黄色 7.5YR 8/4	外縁:ナチュラヨコナメ 内部:ヨコナメ、ヘラ ケヌメ	草田5畠			
33-7	25-2	A	C1	2層		弥生土器	直	D4(B)	直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:にじく黄緑 10YR 7/4 内部:白色 7.5YR 7/6	外縁:ヨコナメ 内部:ヨコナメヘルミカツリ	草田5畠			
33-8	24-1	14	A	C1		弥生土器	直	D4(B)	やや粗(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:白色 2.5YR 7/4 内部:白色 5W5Y 7/6	外縁:ナチュラル 内部:高野(ため不規則)	草田5畠			
33-9	25-2	A	B2	苔苔土		弥生土器	直	D5(B)	やや粗(2mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:にじく黄緑 10YR 6/4 内部:白色 7.5YR 6/4	外縁:ハク、ヨコナメ 内部:ナチュラル	黒野			
33-10	25-2	3	A	C1		弥生土器	高坪	D6(B)	やや粗(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:白色 7.5YR 5/6 内部:白色 7.5YR 5/6	外縁:ナチュラル 内部:ケヌメオダマ	草田5畠?			
33-11	24-1	16	A	C1	S002		弥生土器	削面付		やや粗(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	良好	外縁:白色 7.5YR 5/6 内部:白色 7.5YR 5/6	外縁:高野(ため不規則) 内部:高野(ため不規則)	草田5畠		
33-12	25-2	A	C1	褐色土		弥生土器	高坪	D7(B)	直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:白色 7.5YR 7/6 内部:白色 7.5YR 7/6	外縁:高野(ため不規則) 内部:高野(ため不規則)	草田5畠			
33-13	25-2	A	D1	2層 細粒土		弥生土器	直(たまに砂)		直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:白色 7.5YR 6/6 内部:白色 10YR 6/4	外縁:ナチュラル 内部:				
33-14	25-2	A	C1	2層		弥生土器	低窪地	D8(B)	直(2mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:白色 2.5YR 7/3 内部:白色 2.5YR 7/3	外縁:ヨコナメ 内部:高野(ため不規則)	出雲4畠			
33-15	25-2	B	A C1	褐色土	土製品	瓶	良好	直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:白色 7.5YR 6/4 内部:白色 10YR 6/4	外縁:高野(ため不規則) 内部:陶瓶底	出雲4畠				
33-16	25-2	A	C1	2層 細粒土		須恵器	低窪地	D12(B)	直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:白色 7.5YR 6/6 内部:白色 7.5YR 6/6	外縁:田中ナデ、田中ヘルミカツリ 内部:田中ナデ、ナチュラル	(最大径:15cm)			
33-17	25-2	A	C1	2層 細粒土		須恵器	身	D13(B)	直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:白色 7.5YR 6/6 内部:白色 7.5YR 6/6	外縁:田中ナデ、ナチュラル 内部:田中ナデ、ナチュラル	(最大径:15cm)			
38-1	26-2	18	B	S03		弥生土器	直	155	直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:浅黄色 10YR 8/4 内部:白色 10YR 8/3	外縁:高野(ため不規則) 内部:高野(ため不規則)	平日准 測定			
38-2	26-3	B	S03		弥生土器	直	157	直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:浅黄色 10YR 8/4 内部:白色 10YR 8/3	外縁:ナチュラル 内部:ナチュラル	草田4~5畠				
38-3	27-1	21	B	S03		弥生土器	直	D13(B)	直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:白色 7.5YR 6/6 内部:白色 7.5YR 6/6	外縁:ヨコナメ 内部:ヨコナメヘルミカツリ	草田4~5畠			
38-4	27-1	B	S03		弥生土器	高坪	D15(B)	直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:浅黄色 10YR 8/4 内部:白色 10YR 8/4	外縁:高野(ため不規則) 内部:高野(ため不規則)	草田4~5畠				
38-5	27-1	B	S03		弥生土器	低窪地	D20(B)	直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:白色 7.5YR 6/6 内部:白色 10YR 6/4	外縁:ナチュラル 内部:ナチュラル	草田4~5畠				
38-6	27-1	B	S03		弥生土器	高坪	D20(B)	直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:白色 7.5YR 6/4 内部:白色 10YR 6/4	外縁:ヨコナメ 内部:ヨコナメヘルミカツリ	2条の田間				
38-7	27-1	B	P67		弥生土器	削面付	D17(B)	直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:白色 7.5YR 6/6 内部:白色 7.5YR 6/6	外縁:ヨコナメ 内部:ヨコナメヘルミカツリ	草田4~5畠				
38-8	27-2	B	P69		弥生土器	低窪地	4.6	直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:白色 7.5YR 6/6 内部:白色 10YR 6/4	外縁:ナチュラル 内部:ナチュラル	草田4~5畠				
38-9	27-1	B			弥生土器	直	D16(B)	直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:白色 7.5YR 6/6 内部:白色 10YR 6/4	外縁:高野(ため不規則) 内部:ヨコナメヘルミカツリ	草田5畠				
38-10	27-1	B			弥生土器	直	D17(B)	直(1mm以下の砂粒を多く含む)	直	直	外縁:白色 7.5YR 6/4 内部:白色 10YR 6/3	外縁:ナチュラル 内部:ナチュラル	草田6畠?				

第4表 宮尾III遺跡出土石製品観察表

検出番号	写真番号	取上番号	地区	グリッド	遺構名	層位	種別	商標	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
17-11	25-1		A	C1	S02		石製品	硯石	34.5	19.0	13.8	21820	3面が削減 砥状岩?
34-1	27-3		B	C2		1層	石製品	刮刀	2.0	2.7	1.4	5.6	黒曜石
34-2	27-3		A	C2		1層	石製品	刮刀	4.8	2.2	3.3	60.8	黒玉質
	27-3		B		S03		石製品	刮刀	0.9	0.8	0.3	0.1	黒曜石 写真のみ(上)
	27-3		A	C1			石製品	刮刀	1.15	0.7	0.5	0.34	黒曜石 写真のみ(下)

第5表 宮尾III遺跡出土金属製品観察表

検出番号	写真番号	取上番号	地区	グリッド	遺構名	層位	種別	商標	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
17-12	24-5		A	C2	P26		鉄製品	灯	6.15	1.2	0.9	5.7	
34-3	27-4		A	C2		表土	鉄製品	短刀	29.2	3.1	0.7	146.2	素戔戸 銅鏡背後 目打刀。頭をもつ

写真図版

図版 1



遺跡遠景(東から)



遺跡から広瀬市街を望む

図版 2



調査前近景（東から）



A 区西壁土層

図版 3



A 区南壁土層

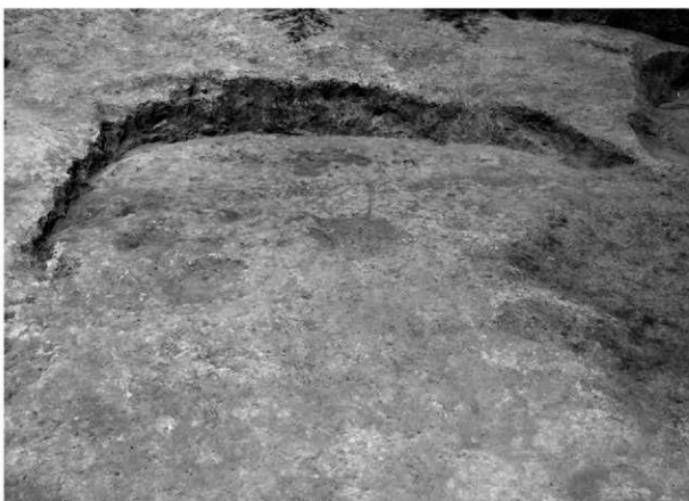


A 区 - B 区間土層

図版 4



SI01 土層



SI01 床面検出

図版 5



SI01 完掘



SI01 炉 棚出



SI01 炉 土層



SI01 炉 完掘



SI01 炉 完掘 (東から)

図版 6

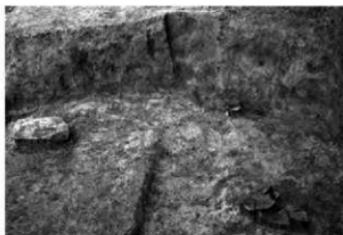


SiO₂ 土層



SiO₂ 床面検出

図版 7



SI02 床面遺物出土状況 1



SI02 床面遺物出土状況 2



SI02 壁際溝土層



P18 土層 (遺物出土状況)



SI02 完掘

図版 8



加工段 1 検出



加工段 1 土層



加工段1ピット完掘



加工段1床面落ち込み

図版 10



北斜面加工段群（加工段 2～6）検出



加工段・P63・SK02 土層



加工段 2～4 土層



加工段 3 土層



加工段 6 土層

図版 11



加工段 2～6 完掘

図版 12



加工段 7



SD01 土層



SD01 遺物出土状況

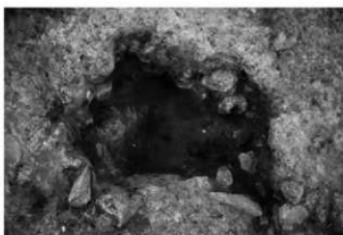


SD02 土層

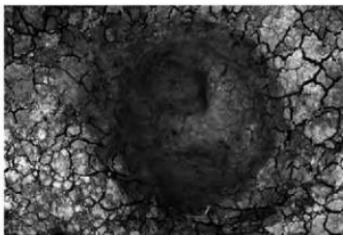
図版 13



SD02 完掘



SK01 完掘



SK03 完掘



SK02 完掘

図版 14



SK04 完掘



SK05 土層

図版 15



SK05 完掘



SK06 土層

図版 16



SX01 完掘



P16 土層



P25 土層

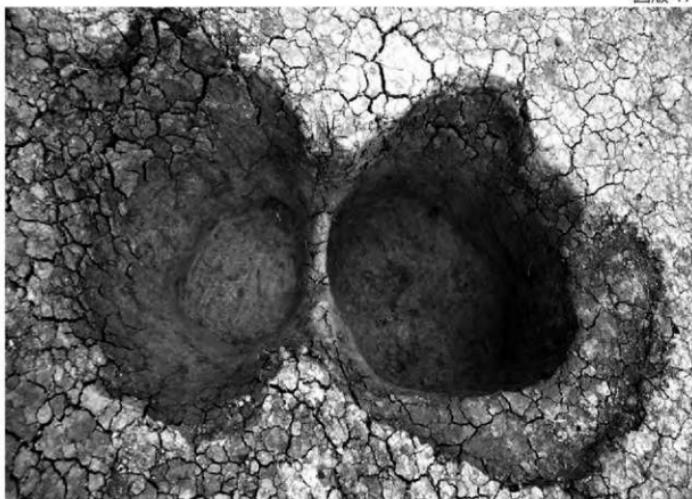


P26 土層

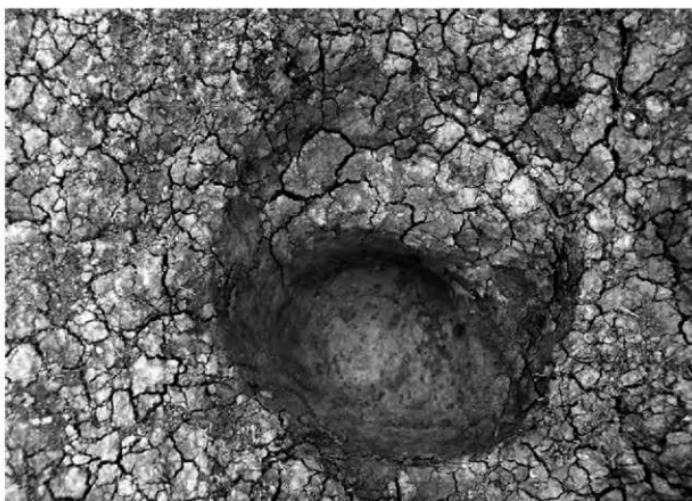


P47 土層

図版 17



P16・26 完掘



P63 完掘

図版 18



A 区南部遺構完掘（加工段 1・SD02 ほか）



SD02 周辺ピット完掘

図版 19



A 区北部遺構発掘

図版 20



B 区遺構検出（南東から）



S103 検出（南東から）

図版 21



壁際溝 1・2 土層



壁際溝 2・3 土層



P86 土層



P86 内 土器



S103 床面土器

図版 22

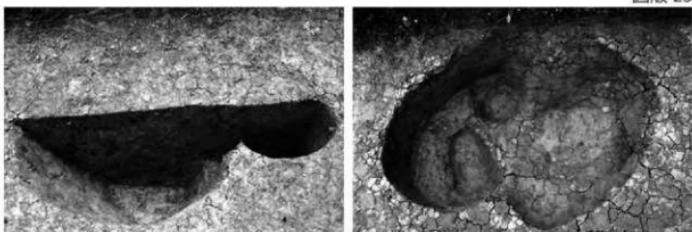


S103 挖削状況



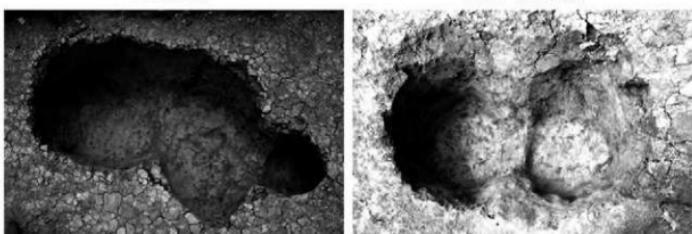
S103 完掘

図版 23



P68-69 土層

P81-80・78-79 完掘



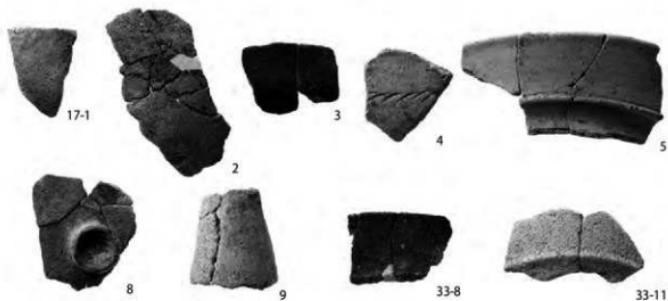
P68-69・95-94 完掘

P67 完掘

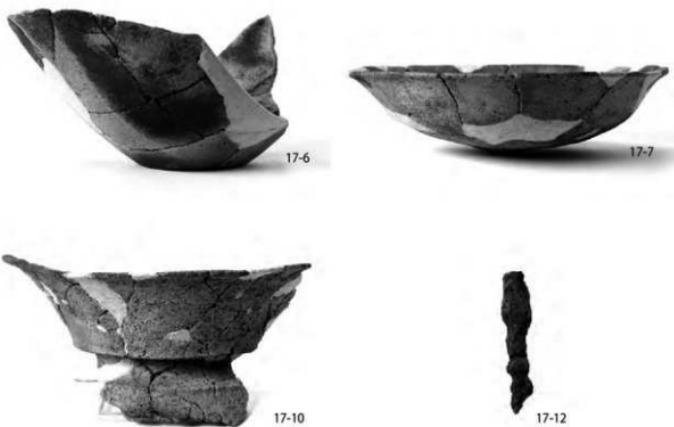


B 区全景(南東から)

図版 24



A 区遺構・遺構外出土遺物



A 区遺構出土遺物



17-11

A 区遺構出土遺物



33-1



3



4



5



6



7



9



10



12



15



13



14



16



17

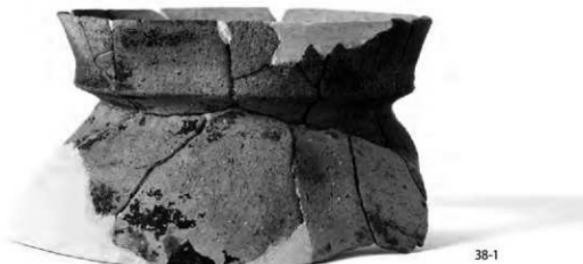
A 区遺構外出土遺物

図版 26



33-2

A 区遺構外出土遺物



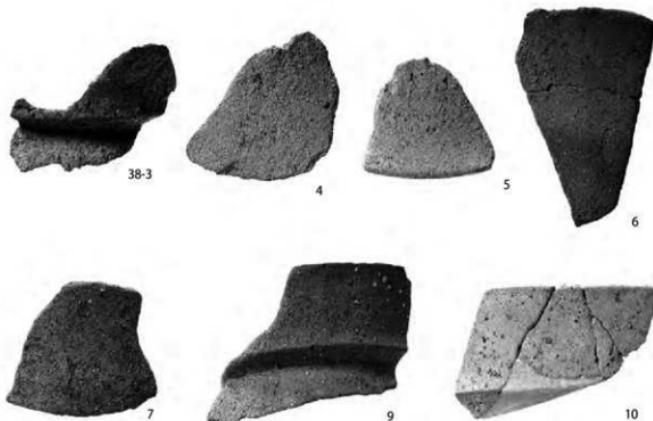
38-1



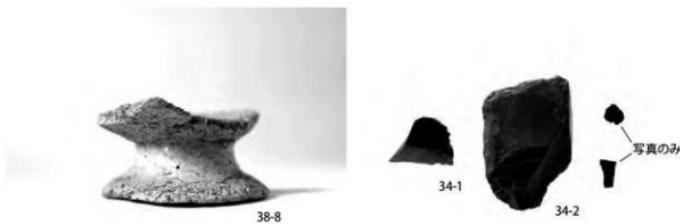
38-2

B 区遺構出土遺物

図版 27



B 区造構外出土遺物



B 区造構外出土遺物

遺跡出土石製品



34-3

A 区出土金属製品

報告書抄録

宮尾Ⅲ遺跡

国道432号菅原広瀬バイパス建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書1

発行 2022（令和4）年3月
発行者 島根県教育委員会
編集 島根県教育厅埋蔵文化財調査センター
〒 690-0131 島根県松江市打出町33番地
電話 0852-36-8608

印刷 柏村印刷株式会社
〒 697-0034 島根県浜田市相生町3889番地
電話 0855-23-2040